めぐりアート静

4つの会場をめぐる、アートの散策。

2018

10/23 tue - 11/11 sun

ヒロバのみ10/20(土)から

静岡市美術館のみ11/25(日)まで

東静岡アート＆スポーツ/ヒロバ＝白砂勝敏 石上和弘 木下琢朗
岩野勝人 千葉広一　静岡県立美術館＝鈴木諒一
静岡市美術館＝杉山功　中勘助文学記念館＝ノエル・エル・ファロル

http://megururi.net

主催：静岡大学、静岡県立美術館、静岡市美術館、静岡市、（公財）静岡市文化振興財団

平成30年度 文化庁
国際文化芸術発信拠点形成事業

2018/05/16

めぐるりアート静岡 2018 開催決定！

第６回目となる「めぐるりアート静岡」を今年も秋に開催いたします。
［展覧会情報］
めぐるりアート静岡 2018
会期：2018年10月23日（火）～11月11日（日）
＊ヒロバのみ 10月20日（土）～
会場：静岡県立美術館、静岡市立美術館、中勘助文学記念館、東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ
主催：静岡大学、静岡県立美術館、静岡市立美術館、静岡市、（公財）静岡市文化振興財団

2018/05/26

1周年記念イベントに向けて

昨年、東静岡アート＆スポーツ/ヒロバに突如として現れた巨大なコンテナ・アートベース。
大きなキリンと並んだ姿を目にしたことのある方も多いはず。そのキリンの制作者である、作家の岩野勝人さんが、ヒロバの1周年記念イベントに向けて、コンテナの大改造を開始しました！
静岡の新たなアートの発信地となるべく作られたコンテナ・アートベースが、今年度よりいよいよ本格稼働します。
いろんな企画盛りだくさんの1周年記念イベントでは、岩野さんによるコンテナ・アートベースの公開制作も予定されています。新しくなったコンテナの姿や岩野さんの迫力の公開制作を見に、皆様ぜひお立ち寄り下さい！

2018/05/27

木下琢朗さん公開制作 開始

昨日に引き続き、今日もヒロバ1周年イベントに向けての準備が進められましたが、本日より彫刻家の木下琢朗さんの公開制作がスタートしました。
制作を始めるにあたり、まずは朝一番に静岡市玉川地区へと出発。自然豊かな玉川より手に入れたヒノキを持ち帰り、そのまま材料に用いるという熱の入ったこだわり具合。
いよいよ公開制作が始まると、得意のチェーンソーであっという間に丸太の姿を変化させていきます。抜群のチェーンソー捌き！
周囲にヒノキの香りが広がり、まるで先程の森の中に本当に居るかのような雰囲気の中、どんどん制作が進みます。

本日はここまで完成！チェーンソーひとつでここまでの仕上がりは、まさに職人技です！

2018/06/03

1周年記念イベント、開催！

本日大盛況のもとに開催された、東静岡アート＆スポーツ/ヒロバ1周年記念イベント。
朝からたくさんのお客様が絶え間なく訪れ、その中で様々な催しが行われました。
まずはおっきなキリンが目印のコンテナ・アートベースでの、彫刻家・岩野勝人さんの公開制作。
巨大な金属板を巧みに加工し、絶妙な見え方の反射を表面に作り出していきます。

水面のような見事な反射が完成！！！
実はこのプレート、コンテナ・アートベースの一部分として作られたもの。一体どこに使われるものなのかは、ぜひ皆様の目でお確かめ下さい！
続いては富士宮市在住の造形家・白砂勝敏さんのライブ演奏。竹や紙や木などを用いて製作したユニークなディジュリドゥと呼ばれる筒状の楽器の音色を、晴れ渡る青空の下で響かせます。

吹き方によって調節される独特の音色に、多くの方々が耳を傾け集まってきます。演奏に用いた楽器はコンテナ内のギャラリースペースにて展示され、音色を味わったあとは作家の白砂さんに多くの皆様が質問を投げかけていました。
そしてコンテナ・アートベースの中に設置された黒板が開放されると、あたりの子どもたちが興味津々に集まってきます。そして気付くとお絵かきタイム！ひとりがはじめると次々に、色とりどりのチョークを手に、皆がのびのびとお絵かきをはじめました。初めは何もなかった黒板が、いつのまにかこんなにも賑やかに！参加してくれた皆様の手によって、1周年記念イベントにふさわしい素敵な作品が出来上がりました！！！
おかげさまで無事1周年を迎えた東静岡アート＆スポーツ/ヒロバ。今回大活躍したコンテナ・アートベース＆コンテナギャラリーでは、これからもたくさんの催しが企画されています。
2年目に突入した東静岡ヒロバのこれからに、皆様ご期待下さい！！！黒板が開放されると、あたりの子どもたちが興味津々に集まってきます。

2018/09/05

コンテナ・アートベース 黒板お絵描きコーナー大改造！

今年6月に１周年を迎え、コンテナギャラリーでの個展開催やワークショップも開始するなど活発な動きを見せている東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ。その個展の開催中に大好評を博したのが、コンテナの中にあるこの黒板お絵描きコーナーでした。今回、人気のお絵描きコーナーの黒板をさらにパワーアップさせるべく、コンテナ・アートベースの作者である彫刻家・岩野勝人さんが京都よりおいでになり、9月1日からの3日間、様々な作業を行って下さいました！
この大きな黒板、実は岩野さんが一から手作りしたもの。今回はなんと、コンテナの内側の壁いっぱいに、その黒板を広げてしまおうという計画！
まずは材料の木材を切断し壁に取り付ける作業。９枚の大きなベニヤ板を、様々な工具を駆使して手際よく加工し取り付けていきます。

取り付け完了。ここから、どのようにして黒板に生まれ変わっていくのでしょうか？
黒くするのかと思いきや、まずは下地に白いペンキを塗り始めました。実はこれ、この後の黒板塗料を塗るために必要な作業とのこと。３面真っ白になったコンテナの内側。これもなかなかオシャレな感じに。そしていよいよ、黒板塗料の登場！
先程の白ペンキとはまた異なった特性の塗料を、ムラなく美しい表面に仕上がるよう、素早くローラーで塗っていきます。作業も終盤に差し掛かってきた頃、近くで遊んでいた子ども達がやってきました。見慣れないたくさんのモノに子ども達は興味津々。すると作業中の岩野さん、なんと出来たてホヤホヤの黒板を子ども達に開放！

これには子ども達も大喜び。あっという間にその場でお絵描きタイムが始まってしまいます！
子ども達の協力で試し書きのテストも終わり、無事、黒板は完成！よりたくさんの皆様に楽しんでいただける、新たな黒板お絵描きコーナーに生まれ変わりました！！！
次々と姿を変えていくコンテナ・アートベース。
今月の終わりには、コンテナの外壁を塗り替える岩野さん開催のワークショップも予定されています。さらには出来たばかりの黒板には、次なる展開の構想の様子も…？？

2018/10/15

「きこりストーブでスモーク体験」ワークショップ開催しました！

開催を目前に控えた、めぐるりアート静岡2018。
そのプレイベントとなる「きこりストーブでスモーク体験」のワークショップが、昨日東静岡アート＆スポーツ／ヒロバにて開催されました！
今回のワークショップは「火」と「食」がテーマ。彫刻家・木下琢朗さんの作品《刀耕火種～森のたねのゆくえ～》の制作過程にも登場した「きこりストーブ」。元々はきこりのかたなどが、山で暖をとる際などに用いられたものだそう。それを使って、おいしい燻製を作って味わいながら、素材のやってきた山のことにも思いを巡らせてみる…、
そんな今回のワークショップの講師としてお越し頂いたのは、安倍川上流の玉川地区にて林業を営む「玉川きこり社」代表の繁田浩嗣さん。「地元の素材を利用することで、それらの育った風景などを思い浮かべて欲しい」と、玉川地区で採れた木材を準備してきた繁田さん。まず登場するのはヒノキ。玉切りになったヒノキの丸太には、チェーンソーで入れられた数本の切れ目。油をたっぷり含んだ松の木の根っこや、燃えやすい杉の葉っぱを使って、まずはその切れ目から、丸太へと火を燃え移らせるところからスタート。切った木は、実は中心に近いほど油を多く含んでおり燃えやすく、逆に周りは水分を多く含んでいるため燃えにくくなっています。その性質により、外側は元のかたちを保ちつつ内側だけが燃えていくのを利用したものが、このきこりストーブです。

次に登場するのは、玉川のヤマザクラ。ヤマザクラの枝を刃物で削り、今回使う燻製のチップへと加工していきます。出来たチップをアルミホイルのお皿に乗せ、中華鍋にセット。まずはベーコンを網に乗せ、フタをしてきこりストーブの上にセッティングします。するとストーブの熱によって、ヤマザクラのチップからたくさんの煙が！この煙がなくなるまで、待つこと数分。出来上がった鍋のフタを、ゆっくりと外してみると…。

見事、燻製の完成！！！
ちょっと味見をしてみると、ヤマザクラのチップの煙によって、深みのある独特の香ばしい味と香り。あっという間に、見た目にも香りにも大変おいしい燻製が出来上がるのに皆様びっくり。そこからは各々準備してきた、お好みの食材をどんどん燻製に変えていきます。チーズに卵にウィンナー、笹かまぼこからホタテまで、本当においしそうな燻製が次々と出来上がりました！おいしく燻製を頂いたあとは、木下さんによる「きこりストーブ」の制作実演。きこり社さんの用意してくださった丸太に、得意のチェーンソーで切れ目を入れていく様子を、皆様の目の前で披露してくれました。

そして、やっているとどうしても木のことをお話ししたくなるという繁田さん。きこりストーブで必要な向きに切れ目を入れることの難しさや、チェーンソーの刃の向きによって、出来るおがくずのかたちが変わってくることなど、林業のプロならではのお話を聞かせてくださいました。
「山と街との繋がりを感じてもらうため、その土地を流れる安倍川の上流で育った木を用いて制作を行いたい」という思いを持つ木下さん。ヒロバでの公開制作を経て、今回のめぐるりアート静岡にて展示される《刀耕火種～森のたねのゆくえ～》に用いられた木も、実は玉川きこり社さんのご提供によるもの。木下さんと繁田さん、ふたりの山に対する思い、また山と街とを繋ぎたいという思いがかたちになったような、素晴らしいワークショップでした。「森のこれからの行く末を考える、その象徴として」制作したという木下さんの作品をご覧になりながら、ぜひ皆様も、その木々のやってきた玉川の山に、思いを巡らせてみてください。

2018/10/21

21日ヒロバ・ライブ＆アーティストトーク開催されました

他の会場より一足先に展示の開始された東静岡アート＆スポーツ／ヒロバにて、21日、参加作家である白砂勝敏さんと石上和弘さんのアーティストトークが行われました。トークに先駆け、まずは造形家でもあり演奏家でもある白砂勝敏さんのライブ演奏がスタート。
白砂さんが吹いているのは、今回の展示でも見ることが出来る自作の「ディジュリドゥ」と呼ばれる楽器。鼻から吸って口から吐く、「循環呼吸」という独特の吹き方で演奏されるオーストラリアの管楽器で、力強い低音を連続して響かせての演奏は迫力満点。写真左で笛を吹くのは、白砂さんと同じく手作りの楽器を各地で演奏しているというご友人のKAERUさん。驚くほど澄んだ響きを持つ竹笛の音と、ディジュリドゥの低音とが混じり合い、心地よい空気がヒロバへと広がっていきます。

演奏が終わると、静岡大学の美術教授である白井嘉尚さんとのアーティストトークがスタート。
沖縄・西表島のジャングルを切り拓きターザンのようにサバイバル生活を送ったり、造園業の傍ら全国放浪の旅を続けるなど、当時から型破りな生き方をしていた若き日の白砂さん。そこからどのように美術の道へと入っていったかが語られていきます。初めてお金を払って入った沼津の美術館で、白砂さんの独特の風体を目にした副館長に声をかけられ、「個展をやらないか」といきなり持ち掛けられたのが初めての展示のキッカケというのだから驚きです。そして音楽に関しても、海で拾ったビニールパイプをあちこちの公園に出没し吹いていたら、これも声を掛けられいきなりプロのステージへ。
「普段はやりたいことをやると怒られるが、美術では、やりたいことをやると、やり過ぎると褒められ、認められる。自己の解放をすることが許される」、そんなところが自分にあっているのではないかという白砂さん。過去の展覧会で白砂さんの楽器の展示を見、「本来音の良さを追求するものである楽器が、造形としても非常に面白いものになっていて驚いた」とは白井教授。「今回の展覧会ではそのときの楽器の展示のイメージでお願いしたら、それとは異なる石の作品なども現れて広がりを見せた。それも白砂さんらしくて良いのではないか」と言います。常に様々なことに挑戦し続ける白砂さんの生き方が、ありありと伝わってくる素敵なアーティストトークでした。
引き続いては、ヒロバの中央に巨大な立体作品を出現させた、彫刻家・石上和弘さんのアーティストトーク。作品をともに紐解くのは、常葉大学の美術准教授であり、常葉美術館の館長でもある堀切正人さん。

「道の作り方」と名付けられたその彫刻作品は、一見すると巨大な車輪の付いた何かの乗り物のようですが、実は人の通ることの出来る道の上に車輪が付いている、という不思議な構造。そしてよく見るとそれ以外にも、あちこちに少しずつ違和感を覚えるような、不思議な構造を持たされて作られています。
たとえば、一本一本違う角度で作られた手すりの柱。道に対し微妙に角度のある状態で取り付けられた車輪。それらによって、作品の正面を探そうとするとそれが簡単には出来ないことに気付かされます。そもそも車輪が正円でなく、楕円形でそれぞれに向きも違っており、遠巻きに見るとどこか落ち着かないような、まるで動き出すような印象を与らえることに気付くかもしれません。
すぐそばを通る国道一号とJR東海道線とに挟まれ、間近に旧東海道の跡もあるというこのヒロバを、「動いている場所」「落ち着かない場所」と感じたという石上さん。それは太古から常に人が動き流れていた場所という意味でもあるし、またヒロバのあるこの土地の活用方法が長年変転してきているということも含まれていると言います。道がまず作られ、文明の発達によって車輪がその上を通るという、道の出来ていく過程。様々な要因が重なって、微妙な揺らぎを含みながら進んでいくものである都市計画。この作品を眺め、また実際に道を歩き体験することで、このヒロバという場所の持つそんな様々な歴史へと、想像を掻き立てられます。
完成した後も、作者や鑑賞者が作品に「入り込む」「介在出来る」ことを意識して作られているという石上さんの作品。
トークが終わったあとも、ヒロバを訪れた多くの皆さまが作品に入り込み鑑賞することを楽しんでいました。
ぜひ皆さんも体験してみてください！

めぐりアート静岡 2018

4つの会場をめぐる、アートの散策。

10/23 tue - 11/11 sun

ヒロバのみ10/20 sat から
静岡市美術館のみ11/25 sun まで

東静岡アート＆スポーツ/ヒロバ＝白砂勝敏

石上和弘 木下琢朗 岩野勝人 千葉広一

静岡県立美術館＝鈴木諒一

静岡市美術館＝杉山功

中勘助文学記念館＝ノエル・エル・ファロル

観 覧 無 料

平成30年度 文化庁国際文化芸術発信拠点形成事業
主催：静岡大学、静岡県立美術館、静岡市美術館、静岡市、（公財）静岡市文化振興財団

http://megururi.net

文化庁

まちは劇場！ SHIZUOKA CITY

ごあいさつ ―― 05
白砂勝敏 ―― 06
石上和弘 ―― 10
木下琢朗 ―― 14
岩野勝人 ―― 18
千葉広一 ―― 22
鈴木諒一 ―― 26
杉山功 ―― 30
ノエル・エル・ファロル ―― 34
関連イベント ―― 38
アーティストトーク ―― 39
来場者の声 ―― 40
成果と課題 ―― 41
作品リスト ―― 42

ごあいさつ

『めぐるりアート静岡』は、静岡市内のさまざまな場所を会場に、今を生きるアートを紹介する展覧会です。静岡大学を中心に2013年から始まり、6回目となります。静岡から芸術を発信する場の創出を目指し、今年は、静岡県立美術館、静岡市美術館、中勘助文学記念館、東静岡「アート＆スポーツ／ヒロバ」の市内4カ所で開催しました。

海外を含む8人のアーティストの多彩な表現に出会うことで、見慣れた街がちょっと違って見えることを期待しました。それは、街と人の記憶をめぐる時間の旅でもあります。

「アート＆スポーツ／ヒロバ」のある場所は、かつてこの地の物流を支えた貨物駅でした。そこでは、古い国鉄車掌車を利用した「車掌車ギャラリー」が再び開廊しました。また、貨物コンテナを改造した秘密基地、「コンテナ・アートベース」も、2基のコンテナが装いも新たにお目見え。開放感のある芝生広場やそれに面した雑木林では、それぞれの場の特色を生かすよう、2人の彫刻家におのおの全く異なるアプローチで臨んでいただきました。自伝的小説『銀の匙』で知られる中勘助の仮寓を復元・整備した文学記念館では、海外から参加のアーティストが『銀の匙』に触発された作品を展開。静岡県立美術館と静岡市美術館が手を携えて、静岡にゆかりのあるアーティストを紹介することも、本展の大きな特色です。

また会期中は、すべての会場でギャラリートークが行われ、各種のワークショップや作品の公開制作、食のイベントやライブ演奏など、アートをめぐるさまざまな出会いが用意されました。

芸術はどこか遠くにあるのではなく、誰もが心の中に秘めている、しなやかな弾力です。多くの皆さまに、4つの会場をめぐりめぐっていただき、作品とそれが置かれた場、さらに、まち・ひと・とき、に新鮮なまなざしを向けていただくことを願いました。

最後になりましたが、本企画への参加を快諾し、最大限の力を発揮してくださいました作家の皆さまと、ご協力いただいた関係各位に、この場をかりて篤く御礼を申し上げます。

2019年3月

白井嘉尚

2018/10/20(土)－11/11(日)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

白砂勝敏（しらすなかつとし）

造形家・演奏家／富士宮市在住

1973　静岡県駿東郡長泉町生まれ
1991　田方農業高等学校造園科卒業

2008　モンミュゼ沼津（沼津市立美術館）にて初個展（館企画）
　　その後2018年7月まで企画個展28回 グループ展56回
2012, 2015　グラフィック社「スチームパンク東方研究所2,5」作品掲載
2014　「渋谷芸術祭 －SHIBUYA AWARD－」ヒカリエ（東京）
2015　「第7回 紙のアートフェスティバル」富士芸術村（富士）
2016　「紙わざ大賞26」特種東海製紙（東京）
2018　「大黒屋現代アート展」板室温泉大黒屋（栃木）

旅と出会い／生きること 創る人

白砂勝敏は音楽を奏で造形をおこなう。いずれも独学。20代は造園業の傍ら、過半の時を放浪についやした。たとえば沖縄では、豪州大陸の先住民アボリジニの原初的な管楽器、ディジュリドゥの演奏に出会い地を這う古代音にしびれたという。音楽活動を始めたのは、30歳の頃。東京を拠点としていたジャムバンドのメンバーとしてディジュを吹く。その後、キューバの打楽器コンガの響きに心うばわれ、2年の間、一心不乱に練習に明け暮れた。叩いていると太鼓の皮に指が吸いつき音に粘りがでるように感じたとのこと。それは快感であるとともに楽器の魔力に触れる体験であった。

造形活動も多岐にわたり、鉱石や化石等をガラス瓶に封入した「ブリコラージュ・ボトル」そしてアクセサリー、伐採され廃棄されるばかりの木材による彫刻、呪術的な存在感を示す「白砂式土器」、海岸で拾った石を配置した「水の記憶」、そして陶・竹・木など様々な素材を用いた手作りの楽器等々。事情を知らぬ者には、作られた時代も国や地域も見定めがたいものばかり。それらは、心の深奥から湧き出す創造／想像のマグマによる造形、すなわち謎である。

そもそもアートとは、人に見せ聴かせるものである前に、かつては神や地霊や祖霊への捧げもの、あるいは自らの中に眠る大きな力に気づき育み、そしてそれを解き放つ技・芸であった。20代の白砂は、「からっぽの自分と向き合い／何かを探して」地図を持たず目的地も定めない旅に出た。また30歳で音楽活動を始め、その5年後に造形活動を開始した。それらはすべてつながり現在に至る。
今回はその多彩な活動のなかから、手作りのディジュリドゥとその演奏に焦点を当てることとした。白砂は、「生活と創作が同時進行な人生なので、創作と音楽も自ずと融合していき、ただ創りたくて創りたくて仕方なく、目に見えない感情や感覚、言葉になる前の衝動」と記す。そしてなによりもたくましい生命力。その旅が何処に向かうか、誰にもわからない。

白井嘉尚（静岡大学教授）

アーティスト・インタビュー

「ターザン」という生き方

ターザンになりたくて西表島へ

僕は農業高校造園科を卒業後、植木屋、大工の修行をして、サラリーマンも3年ほど経験しました。その後、興味があったサバイバルを実践しよう、本気でジャングルでターザンになろうと、仕事を辞め沖縄の西表島へ。実際にジャングルを切り拓いて、3、4ヶ月暮らしました。その時に、綺麗な貝殻や面白い異国の漂流物を使ってアクセサリーや生活道具などを自己流でつくった経験が今に繋がっています。

ところが、「文明の力ほしいっす。すみません」って感じで挫折。それから数年放浪した後、家業の植木屋をやりながら、雑貨ショップも開きました。ある時、樹齢300年以上のヤマモモの木を切る仕事が入り、その木で椅子をつくったらこれが面白かった。それが木彫りの始まり。当時は、アートという感覚や認識は全くありませんでした。

楽器は、沖縄を旅していた時に出逢った、アボリジニの金管楽器「ディジュリドゥ」の音に衝撃を受け、以来、つくったり吹いたりしていました。ジャムバンドにも入り、「ディジュリドゥ」やパーカッションを担当、CDも出しています。

つくりたいものをつくるアートの世界へ

35歳の時、モンミュゼ沼津市立美術館で観覧していたら副館長さんに声をかけられました。僕の風体を見て「個展をやらないか」と。これがアートとの出逢いでした。当時、僕が履いていた靴はボロボロのブーツで左右違う物、自分で染めた服や自作のカラフルなハンチング。副館長いわくオーストリアの芸術家フンデルトヴァッサーぽいと。

そこで、天然石を使ったアクセサリーとか、陶器の仮面みたいなものを展示したところ、反響がありました。アートは当時の自分的には、やり過ぎると褒められる。それどころかもっと開放していいのだと、もっと自由でいいんだよと。

他の美術館からも声がかかり、そこでも僕を育ててくれました。何をやってもいい、好きにやっていいと。アート教育を受けていない私にとって実践の個展を通し関係者やご来場者様から多くのことを学ばせていただけました。それは今でも変わらず、いろんな方の応援の上に成り立っていることを強く感じております。

僕は、ターザンになると決めた時から、やりたいことしかやらない。人生は一度だけ。ジャンルも決めません。つくりたくてしょうがないものをつくっているだけなんです。

音楽、アートで、自由に会話する

アートは時代の先を突くもの。今は複合の時代なので、実用的なアートも認められてきています。その意味でも、めぐるりアートでは楽器を主軸に取り上げていただき、ありがたく思います。

楽器作品の展示と実際に演奏もします。創作した「ディジュリドゥ」や「カホン」などの民族楽器や、めぐるりアート用に創作したパーカッションなどをコンテナに展示。不要品を再利用するスタイルは、沖縄で暮らした頃と変わっておらず、現在は壊れた楽器をライトやオブジェに創りかえ、不要なもので楽器を創り演奏する「白砂式音器・再生のムジカ」プロジェクト活動も行っています。

来場者にも体験して頂ける楽器もあります。パーカッションなどいざ演奏しようとすると難しいので、まず触れて、叩いてもらう。そこで「やりたい！」という衝動があれば、面白くなるでしょう。衝動が大事。「やりたいときにやれる！」というきっかけをつくります。

音楽（セッション）は会話です。会話して一つのモノをつくる。今回は、みんなと会話できることを期待しています。そして、「音楽は楽しい」「アートは楽しい」「こんなに自由でいいんだ」という本質を、めぐるりアートで感じてもらいたい。

ライブ風景

コンテナギャラリー展示風景 《白砂式音器シリーズ》2016－2018

ヒロバの40ftコンテナがギャラリーになった。またその側面に、発案者の岩野勝人が大扉が取り付けた。そのことで、ギャラリーとテラスは一体に、、、。テラスはステージであり、芝生広場は開放的な観客席になるだろう。造形家であり演奏家でもある白砂勝敏の自然素材を用いた楽器は、来場者が手で触れることも試奏することもできる。そして、テラスでは毎週末に、ライブや音のワークショップがくり広げられた。

2018/10/20(土)－11/11(日)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

白 砂 勝 敏

2018/10/20(土)－11/11(日)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

石上和弘（いしがみかずひろ）

彫刻家／静岡市在住

1966　静岡市生まれ
1991　武蔵野美術大学彫刻学科卒業

2015　「めぐるりアート静岡」静岡県立美術館（静岡）
　　個展「チョウコクノモリ／チョウコクノヒロバ」
　　静岡カントリー浜岡コース＆ホテル・カルチャーフロア（静岡）
　　「神戸ビエンナーレ アートインコンテナ国際展」準大賞受賞（兵庫）
2017　「第27回UBEビエンナーレ（現代日本彫刻展）」島根県吉賀町賞、市民賞受賞（山口）
　　個展「アフターアップル」ギャラリーナユタ（東京）

石上和弘は、具象から抽象的な形態まで、様々な立体作品を制作するが、そのいずれの場合においても、彫刻としての動勢や量感をないがしろにすることはない。その意味では、きわめて正統な彫刻家であり、であるからこそ石上作品は、概念的な思考実験を越えた地に足がついたリアリティ、すなわち物と場に密着した現実の力を、観る者に突き付けてくるのだろう。

今展の新作については、この原稿執筆の時点ではまだ形を表しておらず、完成を期して待つのみなのだが、ときどきに作家から聞く構想の進展は、非常に興味深いものだった。車輪の正円ではない微妙な歪みとか、鑑賞者の視線の遮蔽と開放とか、通路の軸線と車軸との微妙な関係などなど。こうした彫刻的な試行錯誤が、設置場所との関係を取り結ぶとき、さらに深い意味を成す。

会場となる東静岡駅ヒロバは、古来より交通の要所であり、現在でも多くの交通・情報インフラが通る場である。加えてこの市所有地は、活用方法が変転してきた問題の地でもある。「動いている場だ」という作家の直観は正鵠を得ている。このとき注意したいのは、「動く」とは、作為でもあり無作為でもあるということだろう。なぜ人は動き、町がうまれていくのか。それは必然と偶然のあやなす歴史である。

彫刻家はその地に、車輪型の作品を発想した。当初、車輪の上にブリッジが載る形だったのが、しだいに通路部分に車輪が載るような形に構想が変わった。つまり、単に乗り物的な造形物を作るということではなく、人が歩き、道ができ、その上を車輪が通る。これは文明のメタファーである。しかもそれらは造形的な歪みや揺らぎを内包する。まさにままならない都市計画のメタファーでもあろう。

こうした深い意味が、彫刻の表現の問題として立ち現れてくる。しかも子どもから大人まで、作品に乗ってそれを楽しく体感することができるのだ。石上作品の強さがいかんなく発揮される作品となるだろう。

堀切正人（常葉大学准教授）

アーティスト・インタビュー

「動く」と「留まる」の共存

「好き」でたどり着いた彫刻

私はもともと実家が農家で長男。父親が農作物を生産したり、自分で牛舎を建てたり、「つくること」が身近にありました。一方で美大に進んだのは、どこか農家を継ぐことの呪縛から抜け出そうとしたのかもしれません。

彫刻を選んだのは、絵を描くよりはモノづくりが好きだったから。ところが、大学に入るまでまともに彫刻をやったことがなく、有名な彫刻家の名前すら知りませんでした。その当時は、ミニマルアートの流れで具象が古いと思われていた時代。そこから新表現主義がでて来ていました。思い返すと私が初めに影響を受けたのは、木彫を制作していた高校の恩師。そして、大学3年生の時に気づいたのです。自分も、木が好きだと。そこから、大木を持ち上げて家の梁の存在感を表現するなど、大学の授業とは別に木に対する興味をカタチにしていきました。以来、木の素材はいつも身近にあります。

鑑賞者や作者も介在できる作品を

作品の中に自分自身がどのくらい意識として入り込めるかも、テーマのひとつ。つくり終わってもその作品に入り込みたい。それは、完成後も作品を動かすとか、座るとか、鑑賞者や作者も介在できる道具的なモノにつながっていきました。道具には人の気配がありますから。まず作品自体の自立は大切です。でも自分の意識だけとの関わりではなく、もっと広い関わりを表現できればと思っています。

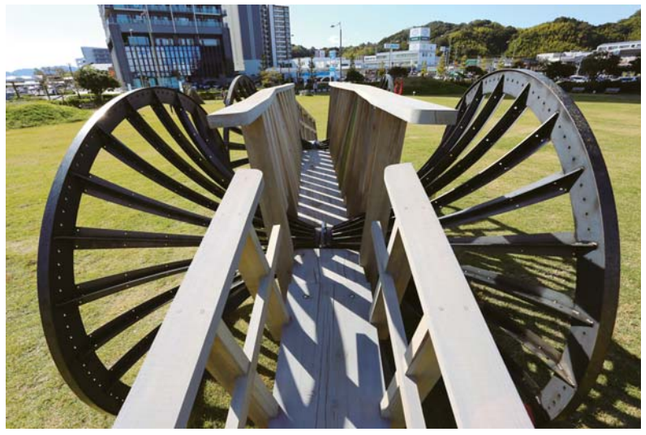
以前、グランシップで富士山の日にワークショップをやることになり、今までの経験値を活かし凹んだ周囲を持つ木製の富士山をつくりました。今までの手法、製材の工夫が総合的に現れた作品『裾野を歩く、山腹に寝転がる』です。作品を見付けた子どもたちが引き寄せられるように走って来るのを見たとき、自分の感覚や、作品が、置かれた場所と直接つながっていることに気づかされました。それが、2017年UBEビエンナーレの市民賞を受賞した『アフターアップル』につながっていきます。

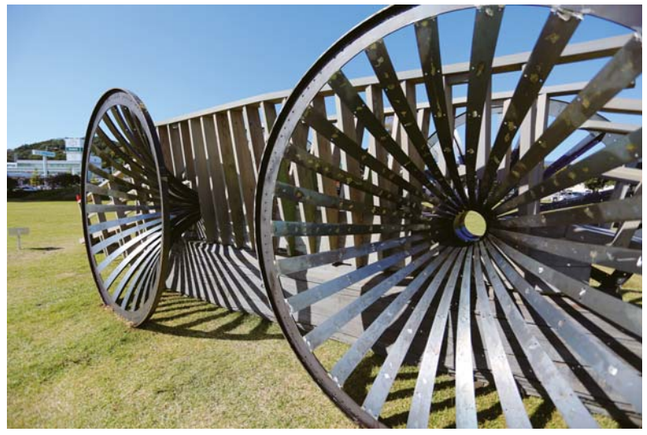
「動くのに、留まる」共存を表現

今回の「めぐるりアート」では、新作を出します。富士山型の車輪がついたブリッジです。展示するヒロバは、国道一号線が北側に走り、南側にはJRや新幹線の線路、そして昔の東海道があります。ここは「動いている場所だ」と感じ、それを表現しようと。人が歩くというただの通路ではなく、昔を思い返しながら今の場所も感じてほしい。まず道としてのアーチがあり、その上に文明の車輪が重なり、人がそれらを踏み越えていく。車輪の上に乗るのは、不思議な体験になります。

さらに、アーチの両側につける柵は、木を斜めにつけることで、自分がまっすぐ歩いている方向に揺らぎが生まれ、どこがまっすぐかを考えさせる仕組みになっています。見る場所によって見通しが良かったり、塞がって見えたりもします。揺らぎが象徴するのは、現在の都市の在り方です。古いものが壊されて新しいものに置き換わっていく。人は目が前についているから前に進みたがりますが、ふと脇を見ればそこに留まるものを発見できて、過去を振り返ることができる。その共存も表現できたらと思っています。

《道の作り方》2018





今展の石上作品は、その上に人が乗ることのできる作品であった。だがむろんそれは単に楽しいだけの遊具ではない。意図的に形づくられた歪みや揺らぎ、そしてブリッジと車輪との相克する構造には、人が歩き、道ができ、その上を車輪が通るという都市生成の隠喩が込められている。物質的、造形的、コンセプト的に強度を備えた彫刻作品が、ヒロバの真ん中に鎮座することにより、その場と、そして展覧会全体の空気を引き締めたと思う。

2018/10/20(土)－11/11(日)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

石上和弘

2018/10/20(土)－11/11(日)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

木下琢朗（きしたたくろう）

彫刻家／掛川市在住

1977　静岡県御殿場市生まれ
2000　東北芸術工科大学美術科彫刻コース卒業

2005　「富嶽ビエンナーレ」入選 静岡県立美術館（静岡）
2007　個展「こだまするカタチ」アートカゲヤマ（静岡）
2012　個展「樹の声を聴く」春野山の村（静岡）
2014　個展「生気遠出」ギャラリーYellow Passion（静岡）
2016　「めぐるりアート静岡」中勘助文学記念館、旧マッケンジー住宅（静岡）
2018　個展「刀耕火種～森のたねのゆくえ～」ギャルリー志門（東京）

次の いのちを照らす象徴

2年前のこと。木下琢朗は、中勘助文学記念館にて「めぐるりアート静岡」の舞台に立った。今年は、東静岡アート＆スポーツ／ヒロバに関わる。すでに6月と7月にコンテナ・アートベースとそのギャラリーで、作品《刀耕火種》の公開制作と展示が行われ、8月には小学生を対象としたワークショップを実施した。

刀耕火種とは見慣れぬ言葉だが、焼畑農法のこと。そこに木下は自然と人との深いつながり、また生命のサイクルへの共感を込めている。

美術大学では彫刻を学び、卒業後は富山県の井波で欄間彫刻の修行をした。次いで再び、創作的な木彫に戻った木下だが、そこでも二つの転機があったとのこと。最初は2011年。祖母と同居することになり、浜松市天竜区春野町に転居、山懐に包まれた集落に住まう。そのことで森に親しむようになり、森の中で作品について考えるようになった。そこでは多種多様な命が響き合い、生の営みが織りなされている。また様々なインスピレーションが湧いてくるようにも感じたという。次の転機は、2017年の「天竜アートキャンプ」への参加である。数百年にわたり山を守り続けてきた自伐林家と出会うことで、その森の美しさと営みの奥深さに感銘を受ける。彫刻家として木材を扱う際の見方にも少なからぬ変化が生じたようだ。山をとりまく様々な問題について、これまで以上に思いをめぐらすようになった。そしてできる範囲で、そのことを人々に伝えたいという気持ちが芽生えた。

今回も、木こりさんと一緒に地場であるオクシズの森に入り、間伐された檜を見定め材とした。木下は、《刀耕火種》を「次のいのちを照らす象徴」と言う。それを再び木を切り出した森の中に、あるいはヒロバの木立のなかに設置することで、来場者の心に「種」を撒く。また今回は、「森と食と命」に想いを馳せる2つのイベントを企画。都会的な暮らしの中では味わうことのできない、森の気配と恵み、そして先人の知恵にめぐり会う絶好の機会になることだろう。

白井嘉尚（静岡大学教授）

アーティスト・インタビュー

旅する「森のたね」

安倍川の記憶を辿る

めぐるりアート静岡は、今回で2回目になります。今回も地元で林業を営む方に安倍川流域玉川地区の森を案内していただき、その森から間伐されたヒノキ材を使わせていただきました。その過程でオクシズ（奥静岡）の豊かな森の資源、守り続けている古来の伝統農法、地域の暮らしの歴史、その土地柄を垣間みることができました。

安倍川は源流の大谷嶺（標高約2,000m）から静岡市内の静岡平野を流れ駿河湾へと注ぎ込む全長53kmの大河です。この地域に暮らす人たちにとって安倍川は、大地をめぐる母なる川です。豊かな川の恵みとその源となってる森林が、静岡独自の歴史と文化をつくりだしていったのです。街の暮らしを支える森林から木を伐採してつくった作品を街中で発表することで、その土地の風土との重なり、自然のめぐりを表現したいと思いました。

そして、土地本来の自然に関心を持つようになったのは、浜松市天竜区の春野町にアトリエを構えてから。かつての春野町は豊かな山の資源を利用して、林業で栄えた活気ある中山間地域でした。ところが、資源を取り尽くされた山から働き手が流失し、それに追い打ちをかけて安価な外材に押され国産材は売れなくなりました。過疎化が進み山の手入れをする人材も年々減っているのが現状です。

新たな視点で天竜の森の魅力をPRしようと林業関係者や芸術家、クラフト作家が集まり、天竜区熊平キャンプ場で「天竜アートキャンプ」という展覧会を開催しました。中山間地域の可能性、今現実に起こっている問題点を話し合う貴重な機会となりました。このときに展示したものが「刀耕火種」という作品です。

火で造形する彫刻

作品の着想は、木こりストーブが煌々と燃える姿をみていたとき、火をコントロールして作品としてカタチづくることを思い付きました。火を水で調整すれば、それが可能ではと考えました。

木こりストーブとは、生木であるヒノキ丸太を加工した天然の暖房器具です。主に寒い時期、木こりさんが山の現場で使用しています。チェンソーで生木の檜丸太に縦に8つに切り込みを入れ、中心部に火種を入れることで暖をとることができます。作品の制作工程において火を扱う造形行為が、自然に寄り添いながら森の中で暮らしてきた太古の人たちの原始的感覚に立ち返れる気がしました。初期のヒト属による火の利用が始まってから、ヒトの社会文化的進化は急激に早まりました。火には穢れを浄化し、身を守ってくれるものとして古代の人たちは感じていました。今でもその火を畏れ敬う信仰は、神社仏閣の祭事ごとには欠かせないものになっています。

樹の声を聴く

私は彫刻の素材である木を扱うものとして、持続可能な自然の在り方をカタチで表現し、その作品が人々の心に触れるものでありたいと思っています。作品の背景に映し出される自然の美しさ、めぐりゆく季節、時間の流れを感じられる展示でありたい。

今回のめぐるりアート静岡では、「刀耕火種～森のたねのゆくえ～」と題し東静岡駅前ヒロバの緑陰広場に空間演出を行います。刀耕火種とは山の林を伐採し、火を放って草木を焼き払い、その場所に種を撒くと言う意味。それは焼畑といわれ、森林に住む人間が生きていく上で必要なサイクルでした。

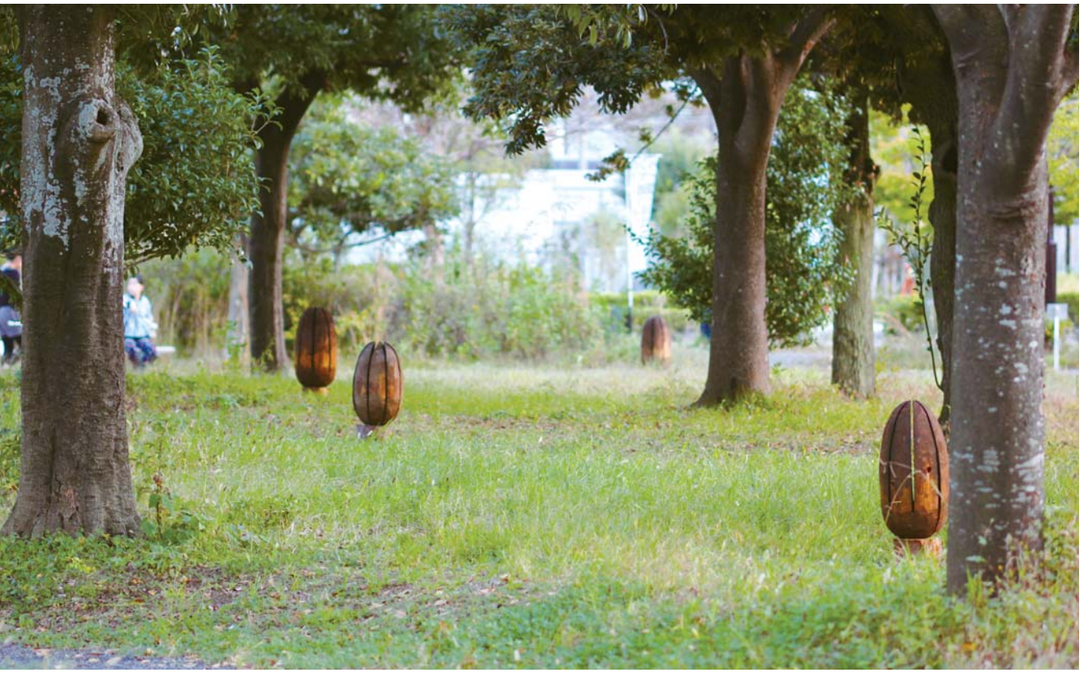
今ある種は、遥か昔から改良の歴史が詰まっている人類の知的財産としての生命体なのです。
時として安倍川が洪水や氾濫をもたらし災害を繰り返してきましたが、川が氾濫することで大地が肥え、森が育ち、静岡の自然が育む静岡平野といわれる土地が生まれました。そうした土地でもある場所に美しく壮大な景観が幾世代までも続くように願い、多種多様の森から生まれる次のいのちの象徴として「森のたね」を撒きます。

「山の資源」を利用した「食」のワークショップ

ワークショップでは、食に注目してその土地の資源を利用します。山に入る機会を得て身近なものがエネルギーになることを知り、いのちのめぐりとは何かを考える体験にしたいと思います。

1つめのワークショップは、地元で林業を営む玉川きこり社による森の資源を活用した「きこりストーブでスモーク体験」で、参加者持ちよりの品々をスモークして食します。2つめのワークショップは、地元静岡市で米店を営む安東米店さんにお願いし、谷津山の麓で柴刈りを行い、それを燃料に美味しいご飯の炊き方スイハニング（炊飯＋ing）をレクチャーしていただきます。

参加し集まった人同士の交流と五感で味わう大切な時を過ごすことでしょう。めぐるりに関わる多くの人が山と街とのつながりに関心を持ってもらえたら幸いです。



《刀耕火種 ～森のたねのゆくえ～》2018

木下琢朗は、6月からヒロバで活動を開始した。作品《刀耕火種 ～森のたねのゆくえ～》の公開制作、コンテナギャラリーでの作品展示、8月はワークショップ、9月末から作品をヒロバの木立に設置し始め本番を迎えた。会期中は、「森」そして「種子」とからめた食のワークショップを企画実施。「刀耕火種」、すなわち「森のたね」とは、材が間伐された静岡の中山間地域に広がる豊かな森の化身である。

2018/10/20(土)－11/11(日)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

木 下 琢 朗

2018/10/20(土)－11/11(日)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

岩野勝人（いわの まさひと）

彫刻家／京都府在住

1961　徳島県三好郡三加茂町（現、東みよし町）生まれ
1988　京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻 卒業
1990　京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻 修了

2008　「IWANO MASAHITO 現代アートによる徳島再見」徳島県立近代美術館（徳島）
2012　「隠岐しおさい芸術祭2012」島根県隠岐郡西ノ島（島根）
2014　「Erosion/Transfiguration－侵蝕と変容の先の関係性へ－」瑞雲庵（京都）
2016　「めぐるりアート静岡」静岡市美術館（静岡）
2016　「めぐるりアート静岡」東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ（静岡）（'17）

「めぐるりアート静岡」では、彫刻家の岩野勝人さんに、第3回（2016年2月）で座れる人型の彫刻「メンタル・チェア」を静岡市美術館で展示して頂いた。そして「アート＆スポーツ／ヒロバ」が会場にくわわった第4回（2016年10-11月）でも、再び「メンタル・チェア」をヒロバ奥の芝地に設置してもらった。鉄筋を無数に曲げて溶接した真っ赤な人型の“イス”は、秋空の芝地の木陰で伸び伸びと、子どもたちの人気の的になった。

同時に岩野さんにはヒロバについて一緒に考えてもらった。静岡市は「まちは劇場プロジェクト」の一環として殺風景だった広大な市有地を、アートとスポーツで「人が集まりライブな活動が起こるまちの中のサードプレース」にするという。めぐるりアートもその「超・実験的な空間」作りに協力することになったのである。

そこで岩野さんが提案してくれたのが、コンテナを使ったアートの秘密基地「コンテナ・アートベース」である。ヒロバがもともと、旧国鉄の貨物の操車場だったという土地の遠い記憶に根差しながら、アートを通じてそこにいろんな人がかかわるベースを作りたい。貨物コンテナを使って、アトリエ機能も持った秘密基地を作る――

そうして、昨年2017年春には40ftコンテナが、秋には12ftコンテナがヒロバに運び込まれた。大学生と一緒に（土砂降りの雨のなか）外壁に色が描かれ、キリンが登場し、今年の春のヒロバ1周年には大扉や窓が開いて、黒板が出来た。もちろん全て“鉄の彫刻家”岩野さんの手作りである。世の中には黒板用の塗料があって、板で下地を作り、岩野さんも助っ人も手や顔を真っ黒にしながら壁に黒板ができた。すると、学校が終わったのか、午後になって子どもたちがやってきて、作業してるそばからチョークで絵を描き始めた。荒涼としていたヒロバもこの3年で芝が育ち、子どもたちのよい遊び場になっているらしい。大きな子も小さな子も、もう夢中で勝手に描いている。

思えば子どもの頃に、気兼ねなく、自由に遊べるこんな場所があったら、楽しいだろう。キリンもいるし、この秋にはマウンテンゴリラも登場する。展覧会では、毎回いろんなアーティストの作品がお目見えするし、アートベースを使った通年の活動も始まっている。子どもたちだけでなく、大人だって楽しい“秘密基地”なのである。

以倉新（静岡市美術館学芸課長）

アーティスト・インタビュー

秘密基地の途中

交流を広げるコンテナ・アートベース

3年前からここ、東静岡アート＆スポーツ／ヒロバでの「めぐるりアート」に出展しています。感謝です。昨年からはコンテナ・アートベースを使った展覧会、それに合わせた公開制作などの関連イベント等も随時実施。ヒロバでのアートの発信基地としての活動は、走り出したといえます。この3年間で、作品やアートベースの構築を通して、市民のみなさま（特に地域の子どもたち）との交流が持てました。今年の活動を通して、その交流がもっともっと広がり、つながっていくことが楽しみです。

キリンに加えゴリラが登場

今年の6月3日、東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ 1周年記念イベントでの公開制作にあわせて、12ftコンテナベースに窓を開け、球体の照明器具をつけ、さらに内部壁面に大きな黒板を設置しました。記念イベントでコンテナを開放すると、黒板は子どもたちに大好評を博しました。子ども達はいろんな色のチョークを手に自由に描きながら、大きな黒板を設置した僕たちの意図をすぐに理解し、思い思いのお絵描きを楽しんでくれました。また、9月には二面ある扉の内側全面を黒板仕様に改造。黒板が拡張することで、多くの子どもたちが自由に絵を描き、表現することができる「秘密基地」になればいいなあと期待しています。

昨年は、コンテナ・アートベースのシンボルイメージとして、等身大のキリン（最後の彩色はヒロバで子どもたちと一緒に）を作成しました。今回は、キリンに加え、マウンテンゴリラを登場させます。コンテナ壁面材を再利用し制作するマウンテンゴリラには、黒板塗料を施し、アートベースのインフォメーションボード的な役割を持たせる予定です。

ヒロバを会話や出会いが広がる場に

今後は、共同制作 ワークショップなど、独自のプログラムの開発、試行を実施していきながら、主にソフト面の展開に注力していきます。このヒロバは、単に作品を鑑賞するだけの場ではありません。市民のみなさま（子どもたち）がモノづくりを通して語り合い、プロセスの共有、出会いを提供できる場としての展開が期待できます。実現できれば、とても素敵かなと思います。

《マウンテンゴリラ》2018

左から《MENTAL CHAIR Ⅲ》1995－2016、《MENTAL CHAIR Ⅳ》1995－2016、《HUGE FOOT》2005

《コンテナ・アートベース》2017～

《キリン・キリン》2017

彫刻家・岩野勝人の“アートの秘密基地”「コンテナ・アートベース」プロジェクトも2年目に入り、年間を通じアートベースの整備が続けられた。6月のヒロバ1周年記念イベントにあわせ、40ftコンテナの壁面を溶断し大扉を付設。12ftコンテナ内の奥壁面を黒板に改修、早速、子どもたちで賑わった。9月、12ftコンテナの扉壁面も黒板にし、10月には昨年のキリンに続きマウンテンゴリラが登場、壁面には燃え立つ羽が描かれた。

2018/10/20(土)－11/11(日)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

岩 野 勝 人

2018/10/20(土)－11/11(日)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

千葉広一（ちばこういち）

美術家／静岡市在住

1967　埼玉県浦和市（現、さいたま市）生まれ
1992　東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻 卒業

2012　個展「いつか・どこか・きっと」ギャラリーsensenci（静岡）
2012　「MAX A5 2012」KONTORS Galleri（デンマーク）
2013　「写真新世紀2013」佳作 東京都写真美術館（東京）
2014～2016　静岡新聞日曜版に詩人平田俊子のエッセイ挿画として作品連載（全88回）
2016　「めぐるりアート静岡」旧マッケンジー住宅、東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ／（静岡）
2017　「めぐるりアート静岡」東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ／（静岡）

温かな記憶として残る場所

千葉広一の作品をジャンルで表すことは難しい。小さな素描をノートから切り抜き、日常にからませ、カメラで写し、言葉を重ねる、という複合的な手法をとっているからだ。結果だけみれば、写真のジャンルに入るだろう。いずれにしても、素描と現実が融合して画像になることで、その場所は、私たちの想像力を喚起する情景に変わる。描かれているのは、子どもの遊びの様子や何気ない仕草、また母親と一緒の場面が多いのも特色といえよう。記憶の底の、だれもが通り過ぎた時間。

過去2年間、千葉は「めぐるりアート静岡」において鮮烈な活動を繰り広げた。2016年は、旧マッケンジー住宅と東静岡アート＆スポーツ／ヒロバの2会場同時開催。旧マッケンジー住宅では全ての部屋、また廊下や階段と関わり、夫妻が暮らした場の記憶に自らの記憶を絡ませて、見事なまでにサイトスペシフィックな展示を実現した。テーマは「何処へ」である。ヒロバには、自身所有の1952年製造の国鉄車掌車を移設。内部をギャラリーとして、もう一つの「何処へ」を提示した。翌年はヒロバのみの参加。車掌車を駅・待合室・客車とし、周囲の緑地を駅前広場に見立てて作品を展開。タイトルは《東静岡駅東駅》であった。それは、人が旅立ち・行き交い・出会い・分かれる所。会期中は、夜、仕事帰りに立ち寄って「待合室」で一時を過ごし、家路につく人もあったという。

今年もまた、車掌車が発表の舞台である。テーマは「想い」。外部から見る作品に「車窓」、内部には「いつか」というタイトルが付された。また、開場時間が夕暮れから夜にかけてという設定が実にユニークである。日の落ちた車掌車の窓に、優しい旅の情景が浮かぶ。

千葉広一は、これまでは、素描を描き現実に挿入することで、小さな場所を私たちの想像力を喚起する情景に変えた。今、彼は、インスタレーションの手法で、現実の場所を造りかえ、来場者の身体と想像力に働きかけようとしている。一人で表現する作品から、他者と関わり時間を共にしながら創り上げてゆく表現行為への移行ともいえよう。

ヒロバが、人々が集い、交わり、温かな記憶として残る場所になることを願って。

白井嘉尚（静岡大学教授）

アーティスト・インタビュー

今夜「想い」を乗せて

そして、表現はインスタレーションへ

これまで2年間「めぐるりアート」に参加して、自分の制作スタイルが変わってきたと感じています。それまでは、一人で何かをイメージして、描き、撮影して作品をつくり出していました。それを「めぐるりアート」の展示会場である旧マッケンジー邸、ヒロバで展示するとなると、空間が広くとても一人でではできませんでした。

結果として、他者の協力を得るわけですが、他の人と一緒につくる時間を共有できたことが、自分にとっては大きかった。それにより、制作表現が作品そのものから空間をつくり上げていくインスタレーションへと幅を広げていきました。

車掌車が人の心を開く「場」に

観る人の捉え方も変化してきたように感じます。去年、来てくれた人たちと会話していて気づいたのが、作品そのものよりもこの空間を味わいに来ているということ。ある意味で淋しい部分もあるけれど、場を創り出す表現と考えれば、そうあるべきなのでしょう。

この車掌車には、人の心に働きかける何かがあるのかもしれません。子どもたちが学校で言えないことを話したり、単身赴任の人がふらっと寄って寂しさを吐露したり、亡くなった人を思い出したり…。普段、学校や職場、家で言えない想いが、自然とあふれてくる。その先がある訳ではないけれど、ここで生まれて、はかなく消えていく場所です。

「いつか」があふれる空間

今年の「めぐるりアート」では、車掌車の公開は夜間限定です。18時から21時まで夜の時間を過ごしてもらいます。そこにはまた新たな出会いがあり、その出会い、関わりが何かをつくりあげていきます。

今回のテーマが「想い」。これまでは、その時々の想いを作品に託してきましたが、今回は空間で表現してみたいと思いました。ここに来た人の「想い」が、共感するような空間です。内側には新たに小屋をつくります。この空間のタイトルが「いつか」。現在、過去、未来、そして行き場の無い「いつか」。さまざまな想いの「いつか」を表現したい。

そして、車窓には往来する人からも見えるようにモニターを設置し、映像を流します。夜、車窓に灯りがつくと、車輪のない車掌車が鉄路を走っているように見えてくる。車窓は、内と外にそれぞれの時間が流れていて、一生関わり合わない時間、人生でありながら、でもそこに確実に存在します。

ここにゆかりのある人、ない人が思い思いに集まり、あたたかな時間を過ごしていただけたらと思います。

《車窓》2018

《いつか》2018

東静岡の「ヒロバ」は旧国鉄貨物駅の跡地である。車体製造1952年という千葉広一の車掌車は、2016年に「ヒロバ」に移設され、旅路の記憶が刻まれたギャラリーとして出現した。それは、いつかどこか通り過ぎた駅。駅舎であり待合室、客車、そして旅立ち。今回は車両そのものがアート作品に変容。窓は窓のまま、映像作品を映し出す画面となった。

2018/10/20(土)－11/11(日)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

千葉広一

2018/10/23(tue)－11/11(sun)
静岡県立美術館

鈴木諒一（すずき りょういち）

photo by TAMAI Miyoko

美術家／東京都在住

1988　静岡市生まれ
2011　多摩美術大学美術学部芸術学科卒業
2013　東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了

2012　「EMON Portfolio Review 第1回グランプリ受賞展「郵便機」」
　　EMON PHOTO GALLERY（東京）
2013　個展「観光」EMON PHOTO GALLERY（東京）
2014　個展「圏内」undō（東京）
2017　「ジャストライト」アキバタマビ21（東京）

写真からメディアを見る

鈴木の作品を見ると、一瞬、私達の理解を宙吊りにするような、不思議なイメージが目に入る。動物であったり、雲であったり、花であったりと、見慣れたものが、時に二重化し、時に変形して、目の前に提示されている。デジタルカメラが一般化した今や、撮影後の写真の操作は、格段に容易になり、一般化しさえしている。しかし、彼はそうした事後的な操作はせず、その意味ではストレートな撮影方法を採っている。特異な点は、鈴木が書物を被写体とすることが多いことである。

例えば《郵便機》では、書物を接写し、時にページを湾曲させて撮影している。また、《観光》の2つのシリーズでは、図鑑の一ページを太陽光に透かすことで、表と裏のイメージが合わさって見えたところを撮影している。鈴木は既存の書物を使いつつも、そこから新しい見方、イメージを生み出している。このような手法によって、彼は構図やアングルといった絵画に類するような規範に従うのではなく、レンズを透過した光を記録するというカメラの働きに基づきつつ、他のメディアを召喚することで、メディアというもの、そして写真を意識の遡上に乗せる。

新作においては、今まで以上にメディアという存在、その働き方に肉薄していると言える。《窓辺》の抽象的なフォルムは、書物の隙間に太陽光が差し込む様子を撮影して生まれたものだ。また、基本的に風に任せてページが繰られており、「自然によって」イメージが自動的に作られるという点で、本作は写真というメディアの特質を延長しているのだとも考えられる。本作は、書物がメディアとして機能し始める瞬間を浮かび上がらせ、象徴的に光を用いることで、世界に秩序を与える書物の視覚的な比喩となっている。

一方、《緑の光線》は、花束が接写で撮影され、花の一部にのみピントが合った写真である。花束もまた、人の様々な思いが込められる、メディアの一種と言える。しかし、本作では花束の全体像は把握できず、花がメディアとして作動する以前に留め置かれている。花がどのようにして人の思いを伝える器となり得るのかという問いは、すなわち、人が花をどのように捉えるのかという、私たちの心に対する問いでもある。多様なメディアに囲まれ、またそれらを操る私たちに、メディアの根本に立ち返ることが求められているかのようだ。

植松篤（静岡県立美術館主任学芸員）

アーティスト・インタビュー

写りゆく時間と空間。

「人間の心」を学ぶために芸術の世界へ

私が高校3年になって大学進学を決める際、学校を数ヶ月休み自分が本当にやりたいことは何だと考えました。そこで浮かんできたのが「人間の心」。不定型な自分のビジョンに対し、アプローチの仕方を探った結果、それは他ならぬ芸術によってこそ可能なのではないかと思い至りました。

結果として、美大の芸術学科に進むわけですが、自分には絵をまともに習った経験もなく、美術家の名前すら人並みにしか知らない。だからこそ、教わることが新鮮で、何でも吸収できました。大学には、美術だけではなく、音楽、映画、文学など多様なフィールドに関心を持った友人が多くいて、影響を受けました。

何のための写真かを自らに問う

大学で写真の授業があり、暗室作業を経験したことで面白さに目覚めました。自分以外の存在が半分を占めていて、それをコントロールするのが写真です。加工しないことを前提に考えると、その場所の光、カメラと被写体の間の時間、空間が印画紙の面に集約されます。自分が生きている世界の中で起きていたこと、その連なりが一つの面に集約されるのです。それは、子どものころ映画館や学校で観たフィルム上映の映画と似ています。背面の映写機からスクリーンに向かって伸びる光の束のなかに埃が浮いているのを眺めながら、幼い私はその埃と空間も含めて映画なのだと思っていました。

制作には自分の強い意志がありますし、現像作業は自分でコントロールができるのに、作業中に自分のエゴみたいなものが溶けていく感覚があります。作品は思考や実験のいくつもの層からできていて、大きな意味では「表現」なのですが、自分のために制作しているのでもないし、ましてや誰か特定の人のためでもない。では何のためか？まだはっきりしませんが、今後さらに制作していくうちにクリアになっていくと思っています。今はまだその過程です。

身の丈に合った表現方法がある

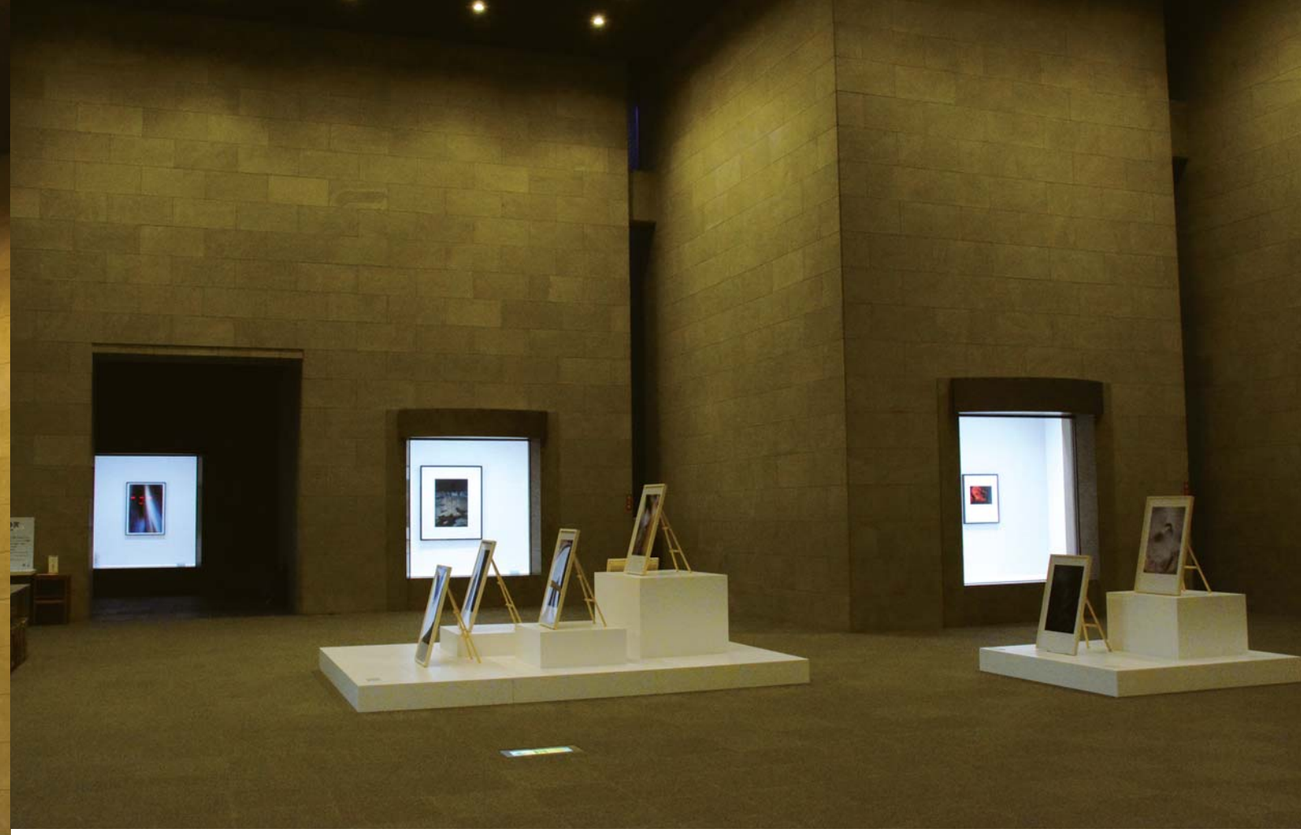
今回の「めぐるりアート」では、書物と花束をテーマにした作品をエントランスホールに展示します。これらの作品は、すべて自分の部屋で撮影しました。なぜ部屋なのか。例えば、フランス人の作家の翻訳小説を読んでいて、自分の中で何か発見があり心が動いたときに、フランスに行ってその作家の人生を垣間みたいと思う人がいます。それはひとつの方法として正しいものですが、小説を読むこと自体はこの部屋の中で起こっているのだから、この場においてどうにか昇華することで、自らの発見を証明することはできないかと考えました。部屋の中で撮影するというのは、そういった意味で私なりの正確さを求めた結果であり、それを試したのがこれらの作品です。

そして、県立美術館の重厚な石造りのエントランスで、そうした作品を展示するということも面白い。石造りの広い空間というのは、洞窟やお墓など人間の歴史のなかで非常に重要な意味をもった場所にもつながるイメージ。時間がたっても残るものや心と、花や写真のような朽ちていくものを、対比するという見方もできます。

ロダン館のラウンジで展示するのは、実家のある静岡市の街並みを30km先から撮影した映像とテクストで構成された作品です。東日本大震災のとき、原発を30km先から撮影し続ける映像がテレビで何度も映し出されました。あの映像とそれを捉え続けるカメラの存在、その距離に私は不思議とひきつけられました。私はボランティアや作品制作など能動的な行動は一切できませんでしたが、他の多くの人同様何かに傷ついていました。そのなかで溜まっていった摩擦のようなものを、個人的なものとして捉え直したとき、はっきりとした主張をもつ言葉のかたまりではなく、曖昧さの集合のようなこの作品を制作することが自分にとってひとつの思考する方法だと感じました。

自分ができる範囲で考えられることがあります。それを少しでも伝えられたらと思います。

《緑の光線》2018



《郵便機》2011

《家》2011/2018

当館では鈴木諒一氏の作品を、写真を中心に19点展示した。エントランスホールでは、1階から2階までを使って写真を展示し、一部では照明を消して、写真に加え映像も展示した。そして、ロダン館につながるブリッジギャラリーの横に位置するラウンジには映像を展示し、外光の入る空間で休憩をしながら映像を鑑賞できるようにした。展示方法に変化を持たせることで、場所ごとに特徴のある展示となった。

2018/10/23(Tue)－11/11(Sun)
静岡県立美術館

鈴 木 諒 一

2018/10/23(tue)－11/25(sun)
静岡市美術館

杉山功（すぎやま いさお）

彫刻家／イタリア カッラーラ在住

1954　静岡県清水市（現、静岡市清水区）生まれ
1977　東京造形大学彫刻学科卒業（’83まで同大研究室に在籍）
1983　カッラーラ美術アカデミー（イタリア）入学（’90卒業）

1987年頃より主にヨーロッパで個展、グループ展多数
1992　「新世代日本-イタリア展」ローマ国立近代美術館、日本文化館（ローマ）
2010　個展　東京画廊＋BTAP（東京）（’14）
2013　「SINTASSI CONTEMPORANEE」パリス・パッレ市立美術館（マッカーニョ、イタリア）
2018　「MICA展」三人展　GALLERY エクリュの森（三島）

パブリックコレクション　ローマ国立近代美術館、世界銀行本部（アメリカ）ほか国内外多数

ふっくらと彫り出された白い大理石の半球の上に、赤い石で小さな神殿が立っている。それは神殿というわけではないかもしれない。ただ家の形象なのかも知れないが、円柱の上にのる簡素な切妻屋根の形は、石ということもあってか、我々にギリシャやローマの神殿を容易に連想させる。

杉山功は、1954年に旧清水市に生まれた。大学で彫刻を学んだ後、1983年にイタリアに渡った。カッラーラの美術アカデミーに学び、以来40年近くずっと彼の地で制作している。カッラーラはイタリア中部、トスカーナ州の北西にあり、フィレンツェやピサから北のジェノバに向かう途中の海沿いのまちである。ローマ時代より良質な大理石の産地として知られる。特に白大理石で有名で、ミケランジェロも石を求めて自ら足を運んだという。

杉山は日本で具象彫刻を学んだ。実家のある清水には、硬い御影石から彫り出した、丸みを帯びた量感豊かな裸婦像が残っている。イタリアでも最初は具象を手掛けたが、すぐに日本から来た自分に何が出来るか、問わざるを得なくなったという。もともと西洋に生まれた「彫刻」は、神の似姿としての人の姿でありその意味で具象である。ギリシャ、ローマ以来の伝統を誇るイタリアは、現代においても戦後、マリーニやマンズーら世界的な具象彫刻の巨匠を輩出した。そんな「彫刻」の本場で、多くの作品を見て、西洋由来の「彫刻」を日本人である自分が作る必然があるのか、問わざるを得なかった。

一度は諦めて、日本に帰るつもりで立ち寄ったパリのポンピドゥセンターで、現代美術の世界に触れたことが転機となり、抽象に転じた。それは、それまで学んできたものを捨て、自分が何を求めているのか一から探す孤独な作業だったという。そのときに思い出されたのは、子どもの頃の船や飛行機の模型が好きだった純粋な気持ちだったという。何故かその骨組みが好きだった。長じて大学に進むときに進路として迷った建築への興味も背景に、イタリアに渡ってから意識せざるを得なかった、西洋と日本の自然観や神に対する感覚の違いがテーマとなり、独特の作品世界を生み出していった。

石はときに木と組み合わされ、石肌を削らない自然石の風合いも多用される。長い階段の先に天を衝く柱が立ち、お社がのるその姿は、私たちには馴染み深い、古代出雲の伝承によるだろう。イタリア語ですべて「SANTUARIO」（聖域）と題されたそれらの作品は、地中海世界の晴朗な石の文明と、八百万の神が住む、雨多い日本の木の文化――悠久の二つのときの流れが、一人の作家の中で出合って思索され、生まれたものである。

以倉新（静岡市美術館学芸課長）

アーティスト・インタビュー

二つの関係と違い

彫刻にふさわしいイタリアの環境と文化

私が彫刻に興味を持ったのは、高校生の時に美術の教科書に載っていた、ピカソが創作したヤギの彫刻を見てからです。それは抽象的な造形で、細部までつくりこんだ作品ではありませんでしたが、私は確かに「ヤギ」を強く感じました。「これは何故だろう？」という疑問が頭から離れなかったのが、彫刻をはじめたきっかけになりました。

大学では彫刻科を卒業後、イタリアのカッラーラ美術アカデミーに入学・卒業し、以来カッラーラを拠点に創作活動をしています。カッラーラという町はローマ時代から良質の大理石が採れることで有名な場所です。日本に戻らなかったのは、ミラノの画廊で個展や海外のアートフェアーでの発表ができるようになったから。そして、大理石の仕事場、運送、道具、梱包などにとても恵まれていることと、当時はヨーロッパの現代美術の市場が日本よりも比較にならないくらい大きかったからです。また、イタリアにはいろいろな柵が少ないので、集中して仕事ができます。文化的なものが私の中で自然に交じり合いますし、イタリアの文化＜ローマ時代からルネッサンス、未来派、イタリア近代具象彫刻（マリノ・マリーニ、ペリクレ・ファッツイーニ、ジャコモ・マンズー等）、アルテ・ポーベラ＞が私に与えたインパクトが強烈でした。一方で、イタリアにいることで日本文化のすばらしさを感じ、もっと日本のことが知りたくなりました。

「時間」「自然観」「神的な存在」がテーマ

私が作品をつくるとき、三つのテーマがあります。一つ目のテーマは時間です。素材に大理石と木を組み合わせることで、時間の経過にともない二つの異なる素材の関係が目に見えないくらい少しずつ変化してゆく、「一期一会」の連続であるという考え方に到りました。自然の環境下では、大理石は経年変化が緩やかで、木の朽ちてゆく速度は速い。常に二つの関係はその時その時、一度きりです。

二つ目のテーマは、渡伊してから感じた、ヨーロッパ人と日本人の自然観の違い。日本人は、自然に対しとても強い敬意を持って接しています。対してヨーロッパ人は、自然を征服しようとする意識を感じます。例えばシンメトリーの庭園、山の上に建築する時にまっ平らに整地して建てる神殿、教会などがそうです。日本だと自然をあまり壊さず、山肌に多くの柱を立てそこに寺院などを建設する例が沢山あります。

三つ目のテーマは、説明が難しい。私は超自然的な力、つまり宇宙を支配するような圧倒的な力の存在を信じています。それは、国や宗教によって神、アラーなど呼び名が違うだけで、同じものではないでしょうか。そのための『神殿 SANTUARIO』を、三十数年つくりつづけています。

静岡での初展示を「めぐるりアート」で

今回の「めぐるりアート」では、これらの三つのテーマができるだけ解るよう作品を展示します。作品は、全部で13点です。独立した台座に2点、二つの長い島に11点を設置する予定です。事前に行くことができないので、展示方法は美術館に任せていますが、じっくりと見ていただけたらと思います。

毎年2、3ヶ月は帰国し、実家のある静岡に滞在します。頻繁にもどってはいますが、地元静岡市での展示は渡伊して以来初めてのこと。この機会に、できるだけ多く地元の皆さんに私の作品を知っていただければと思っています。

左から《SANTUARIO No.417》2017、《SANTUARIO No.425》2018、《SANTUARIO No.420》2017、《SANTUARIO No.369》2013、《SANTUARIO No.114》1996

静岡市美術館では、エントランスホールに杉山功の石彫作品13点を展示した。作品の静謐な美しさを活かすべく、なるべくシンプルな台を用意し、バランスに配慮した。館の特徴でもある広々としたエントランスの、明るく、自然光の入る窓際に設置。朝から夜にかけ1日のうつろう光の中で、作品はさまざまな表情を見せた。

2018/10/23(Tue)－11/25(Sun)
静岡市美術館

杉 山 功

《SANTUARIO No.412》2017

《SANTUARIO No.424》2018

《SANTUARIO No.400》2016

《SANTUARIO No.242》2005

《SANTUARIO No.363》2013

2018/10/23(Tue)－11/11(Sun)
中勘助文学記念館

Noëll El Farol

ノエル・エル・ファロル

美術家／フィリピン カヴィテ市在住

1961　フィリピン、マニラ生まれ
1984　フィリピン女子大学芸術学部卒業
2004　フィリピン大学ディリマン校修了（修士 考古学）

2016 「フィールドノート：1980～2016」国立文化芸術委員会ギャラリー、マニラ（フィリピン）
2017 「アジア見学旅行プロジェクト：出発編」Edwin's Gallery、ジャカルタ（インドネシア）
2018 「Tirada／版 －フィリピン版画の50年 1968-2018－」フィリピン文化センター、パサイ（フィリピン）

1989から1991まで、日本国文部省国費留学生として静岡大学教育学研究科に留学。その他静岡での活動は、A-Value展に参加（1990,1992）、静岡第一テレビ・スカラザホール（1991）及び、sensenci galleryにて個展（1996,1998,2005,2016）開催。

記憶を乗せて運ぶ船

ノエル・エル・ファロルは美術家として、1980年代から現在にいたるまで、フィリピン国内外で精力的に活動を展開している。日本でも瀬戸市文化センター（2001）や福岡アジア美術館（2004）での展覧会に招待されているが、とりわけ文部省教員研修留学生として2年間を過ごした静岡との縁は深く、参加したグループ展に個展を加えると十指にあまる。

その活動は、ミクスドメディアの平面と立体そしてインスタレーション、クリエイティブな造形素材としてのガラスの可能性追求、版画、写真、石彫など多岐にわたり、そのどれをとっても瑞々しい感性が遺憾なく発揮されている。

しかし何よりも、そのテーマ“ネイティブネス（文化の固有性）”に注目すべきだろう。それは太古から海洋を越えた人々の移動と往来があり、文化の伝播と混交、またスペインとアメリカの植民地を経験した群島の歴史。それら全てが折り重なった、信仰と暮らしのかたちを指している。したがって作品は、その初期から民族学や民俗学に寄せる深い関心に彩られていた。そのことは、フィリピン大学美術学部に教授として在職しながら、同大学の考古学の課程を受講し修了するなど、学術的な訓練を自らに課すことによって一層確かなものとなっていった。

「めぐるりアート静岡」では、中勘助文学記念館の作家として、その自伝的小説『銀の匙』を手がかりに展示の構想が練られたとのこと。ささやかな市井の人々の暮らし、しかし一人ひとりにとってはかけがえのない時間、そんな記憶に触れる作品が提示されることだろう。時間と空間を記録に留めることは、「今ここと、それが存在した時空、また自身と他者について思考する際の有力な手がかりになる。問題は、人々はどのようにしたら、他者の知覚を自らの知覚として把握できるのかという点に帰着する。」（Nancy D. Munn、1986）。ノエル・エル・ファロルによる記憶を再構築する試みは、中勘助、そして文学記念館を流れる時に出会う。

白井嘉尚（静岡大学教授）

アーティスト・インタビュー

記憶を探究する「本」

物質に命を与え、視覚的目録を創作

私の作品制作は、好奇心や探究心がモチベーションです。好奇心の対象は、生活や身近なモノやコト、ありふれた日常に存在する様々なオブジェにあります。それらはすべて意味を持ち、思考の産物です。いわゆる「真実」がどのように壊され、また崩れるのか、そこに創作意欲をかき立てられます。

これまで何年にもわたり、精神的な意味でのネイティブネス（土地・国・文化の固有性）に関心を寄せ、そこから作品のテーマを導き出してきました。近年試みているのは、調査観察に基づいてネイティブネスを抽出すること。比喩的な意味で命のない物質に命を与え、感覚や物語や意味を人々と共有しようとしています。私の仕事・作品は、人ならではの関心事や歴史について、視覚的な目録を作るための探求です。

中勘助と自分の過去をつなぐ「本」

今回のめぐるりアートでは、中勘助が『銀の匙』で示したように、自らを語ることに応えてみたいと思いました。この自伝的小説で表された過去の生活や情景は、博物館における資料記録技術的なレベルにまで達しています。同様に、私が提示する収集した個人の日誌も、人々の経験と印象の目録です。作品は本のカタチを取っています。知識の制度として存在し、強制力を持って知識を形成するのが「本」。そこにあるのは、記憶を再構築する探求です。

私は日本に留学していたとき、古民家に住んだことがあります。伝統的な気品を感じさせながらも質素で、家の内部と外部の両方のつながりに、心の静けさと自然を感じました。その経験は、中勘助が生きていた時代に人はどのように暮らし、感じていたのかを熟考するきっかけとなりました。中勘助が幼い頃の自身と深く結びついた一つの匙を手に取ることで、記憶と物語を紡ぎ出していったように、私たちにとっての「銀の匙」を提示してみたい。そして、現在失われつつある他の伝統的なものも取り上げ、学問分野を超えた実験や、科学的な調査を試みたいと思っています。

積極的な参加者がページをめくる

一般的にフィリピン人は、積極的に自らの生活を他者の生活と合わせる傾向があり、それは、アートへの関心においても同じです。その一方で、批評的な思考を養うことについては消極的です。とくに地方では、美術作品に接する時に欧米の見方や感じ方を意識しています。そして、その地方の芸術の価値を高めるために地域／固有のアイデンティティーを美化し、その中に閉じこめる傾向があります。

私は、観客が作品のコンセプトをめぐる言辞や批評的な議論を期待しているのではなく、地殻変動的なアイデアや強烈に実験的なアプローチを求めていると信じたい。私の経験では、日本人はより刺激を求めていて、その多くは精神的な感覚によって高められ、間接的な形で感想を語ることが多いように思います。そして、日本人は感性を大事にしているので、「めぐるりアート」では来場者が積極的な参加者となって、私の作品である冊子のページをめくることで、何かを感じてほしい。

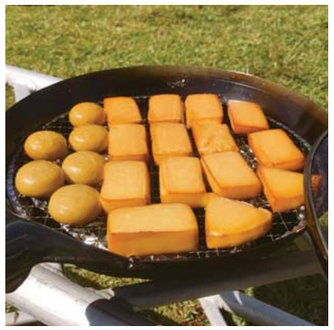
《アナログ・インデックス》2018

中勘助文学記念館は、『銀の匙』で知られる文学者、中勘助と静岡との縁を今に伝える施設である。それは緑豊かな周辺とあいまって、勘助が仮寓した昭和20年頃の面影を今に伝える。ファロル氏は、書物や冊子の姿をした作品で場に寄りそい、自らの、そしてワークショップで紡ぎ出された他者の記憶／記録を開示。縁側に置かれた氏の幼年期の記憶とつながるガラスのオブジェは、秋の日差しを集め、やわらかな光をはなっていた。

2018/10/23(金)－11/11(日)
中勘助文学記念館

ノエル・エル・ファロル

関連イベント



木下琢朗企画ワークショップ　講師：繁田浩嗣
きこりストーブでスモーク体験
10/14（日）東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

木下琢朗企画ワークショップ　講師：長坂潔暁
いのちのめぐり スイハニング
10/20（土）、11/10（土）東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

岩野勝人ワークショップ
公開制作「ゴリラ出現！」
10/28（日）東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

鈴木諒一ワークショップ
色をあつめて、光のカーテンをつくろう！
10/28（日）静岡県立美術館

白砂勝敏ライブ＆ワークショップ
10/20（土）、21（日）、27（土）、28（日）
11/3（土）4（日）10（土）11（日）
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ コンテナギャラリー

千葉広一インスタレーション
10代を生きる者の美術館 あるいは 祈りの場
11/10（土）東静岡アート&スポーツ／ヒロバ 車掌車ギャラリー

めぐるりアート＋
ウィルフリド・ゴンザレス
10/19（金）～2019/4/16（火）静岡県コンベンションアーツセンター

アーティストトーク

10/21 SUN 白砂勝敏
東静岡アート＆スポーツ/ヒロバ

10/21 SUN 石上和弘
東静岡アート＆スポーツ/ヒロバ

10/27 SAT ノエル・エル・ファロル
中勘助文学記念館

10/28 SUN 岩野勝人
東静岡アート＆スポーツ/ヒロバ

11/4 SUN 鈴木諒一
静岡県立美術館

11/10 SAT 木下琢朗
東静岡アート＆スポーツ/ヒロバ

11/10 SAT 千葉広一
東静岡アート＆スポーツ/ヒロバ

11/25 SUN 杉山功
静岡市美術館

来場者の声

静岡県立美術館
写真という形でここまで不思議な表現ができるのが美しいと思いました。　会社員

中勘助文学記念館
日誌が絵つきでかわいらしかった。日常のふとした1コマ、1コマが書いた人の視点で切り抜かれているのに、なぜか自分もとてもなつかしく思った。　学生

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ
座ることのできる作品が面白かったです。また、誰でも書きこめる黒板も子どもが楽しめていたようなので、いいアイデアだなと感じました。　大学生

静岡市美術館
石と木、西洋と日本、興味ありました。　自営業

中勘助文学記念館
とてもよかったです。特にレシートで作られた本と、水の中に虫が入っている展示物に感動しました。　大学生

静岡県立美術館
しろうとが何の知識もなく見ただけで「すばらしい」と言える作品ではない。しかし、作品の紹介文やアーティストトークを聴いた後では、作品に意味を感じることができた。　サラリーマン

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ
スイハニングたのしかったです！！おいしかった！！

中勘助文学記念館
ここは落ち着けていつもいやされます。
丁寧なガイド、ありがとうございました。　50代

静岡県立美術館
知らないアーティストを知るきっかけになり良いと思います。チラシ、ポスターのデザインにひかれました。　会社員

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ
スチームカリンバという作品はおもしろい楽器だった。昔や今、このような楽器があってすごいと思った。　小学生

静岡市美術館
大理石と木という組み合わせで新しい世界を感じました。

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ
さりげないところにある芸術は私には少しむずかしかったです。　大学生

静岡県立美術館
鈴木諒一さんのアーティストトーク、久々に現実から離れ楽しかった。現実生活の中に、少し、この気持ちを持ち込めるようにしたい。　主婦

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ
間近で見たり登ったり描いたり、見る人が関われる作品で面白かった。　大学生

中勘助文学記念館
記憶を閉じこめる作品って素敵だな、と感じた。　大学生

静岡市美術館
石がそのものの形を生かして、日本の神社という形？と合わさってユニークだと感心した。　会社員

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ
どの作品もステキでした・人と関わることで完成する作品がヒロバには多くてよかったです。　学生

静岡県立美術館
光と影の画像が何とも不思議な感覚です。　主婦

中勘助文学記念館
普段行かない、まだ知らない静岡のまちに出かけるよいきっかけにもなった。　大学生

成果と課題

県立美術館の展示について

植松篤（静岡県立美術館主任学芸員）

今回、展示場所については、基本的に作家の着想に任せながらも、館内の見過ごされがちな空間にも注目し展示の構想が練られた。例えば、展示に使用したブリッジギャラリー横のラウンジは、存在に気づかない来館者も多いだろうが、外光の入る眺めの良い部屋である。また、鈴木氏は展示という行為への認識が深く、展示台を多用することにより、写真や映像等の平面的な作品を立体的に構築してみせた。そのほか、解説付きの出品目録兼マップを配布し、館内をめぐってもらえるよう配慮した。「めぐるりアート静岡」は、展示室で行われる通常の展覧会ではなく、その場その場で立ち上がる関係性が特徴の一つである。いかに作品や場所を見せていくか、より丁寧に注意を払っていきたい。

中勘助文学記念館とめぐるりアート静岡

青木良平（公益財団法人静岡市文化振興財団）

日本近代文学を代表する作家である中勘助を顕彰する文学館「中勘助文学記念館」（静岡市葵区新間）は、2016年の第4回「めぐるりアート静岡」展から展示会場に選定されている。これまでに、延べ3人の作家が、中勘助が愛した「藻科地区の自然」、あるいは、中勘助の代表作「銀の匙」を題材に展示を行った。どの作家も、自分の作品世界を大いに広げるというよりも、館と中勘助の文学に寄り添う作品を制作していただいた。普段は近隣住民の利用が多い記念館が、「めぐるりアート静岡」展の展示期間中は、若い方が多く訪れるようになった。来場者にとって、現代美術と文学、双方の魅力を見つける機会となったことを願う。

今後の広報活動を見据えて

柚木康裕（オルタナティブスペース・スノドカフェ代表）

WEBでの広報活動の不足という、これまでの反省も踏まえて今回は開催前から会期終了まで情報発信に務めた。具体的には静的なHPをブログ形式に仕様変更すると共にSNSを併用し、更新頻度を上げるために担当員を配置。即時性と親近感をコンセプトに作家や会場の日常をありのまま伝えることに注力した。敷居の高さが常に問題となる「芸術」を身近なものに感じてもらうためにもWEBでの情報発信は重要であろう。次により多くの共感を生み出し、シェアを獲得するためには何が必要か。もはや展覧会を創るのは作家とキュレーターだけでなく、WEBシステムやデータ解析の専門家の参画も求められているはずだ。「リアル」の領域が拡張を続ける昨今、仮想空間と現場は地続きだという事実を受け止め、関係性を育むWEB広報に取り組む必要がある。

海外在住作家の招聘

以倉新（静岡市美術館学芸課長）

今回初めて海外在住作家2名が招聘された。静岡市美術館の杉山は、旧清水市出身だが、既に40年近くイタリアで暮らし国内での発表は多くない。中勘介文学記念館で展示のファロルは、フィリピン在住で89年に静岡大学に留学、以来、何度か来日している。作品の輸送や送金事務など慣れないための負担も大きかったが、静岡とも縁のある二人を紹介出来たことはよかったのではないか。メールはもちろん、スマートフォンやネットを介したビデオ通話での打合せなど、海外とのハードルは確実に下がっている。グランシップでの「めぐるりアート＋」でもフィリピンのゴンザレスが紹介、作品や作家トークなどから異文化で暮らす様子がリアルに伺える貴重な機会となった。

ヒロバと回遊性

堀切正人（常葉大学准教授）

東静岡ヒロバの会場には、今回、石上和弘の力強い彫刻作品が据えられた。あの広い空間をアートの場と律するには、相当な力量が不可欠であることをあらためて知らされた。とともにそれを成せる作家は多くはいないこと、そしてその実現には人、物、金、時を要することもまた必至である。となると、めぐるり展におけるヒロバ会場の比重は高くならざるをえず、相対して他会場の減少を余儀なくされることとなる。「めぐるり」が謳う回遊性アートイベントの理念は、現実の前に、今一度の強度を試されていると思う。地域ゆかりの若手作家への機会提供、アートに関わる人材の育成という初期のコンセプトとあわせて、再考が必要な時期なのかもしれない。

アートの場、ヒロバ！

白井嘉尚（静岡大学教授）

ヒロバが、アートの場として認知されてきた。岩野勝人の「コンテナ・アートベース」プロジェクトでは、12ftコンテナの内壁全てが黒板に、40ftコンテナがギャラリーに改装されたことで、通年にわたっての多様な活動が可能となった。そこでは、「めぐるり」会期外にも木下琢朗による作品展示と公開制作が行われ、白砂勝敏の造形作品・自作楽器の展示とワークショップ、またライブ演奏の舞台となった。千葉広一は車掌車ギャラリーの西側に、駅舎のプラットフォームのようなステージ（普段は市民の憩いの場）を構想。東静岡駅南口の静岡県コンベンションアーツセンター・グランシップにおける「めぐるりアート＋」との相乗効果も試行した。

作品リスト

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ　2018.10.20（土）－11.11（日）

	作家名	作品名	制作年	技法、素材
01	白砂勝敏	白砂式音器シリーズ	2016－2018	竹、木、金属、陶、他
02	石上和弘	道の作り方	2018	木、鉄
03	木下琢朗	刀耕火種 ～森のたねのゆくえ～	2018	安倍川流域の檜、大井川流域の杉・檜、柿渋
04	岩野勝人	マウンテンゴリラ	2018	鉄板・黒板塗料ほか
05	岩野勝人	コンテナ・アートベース	2017～	貨物コンテナ（12ft、40ft）ほか
06	岩野勝人	キリン・キリン	2017	コンテナ壁、水性塗料
07	岩野勝人	MENTAL CHAIR Ⅲ	1995－2016	鉄、ウレタン塗料
08	岩野勝人	MENTAL CHAIR Ⅳ	1995－2016	鉄、ウレタン塗料
09	岩野勝人	HUGE FOOT	2005	鉄、ウレタン塗料
10	千葉広一	車窓	2018	車掌車の窓に5分15秒の映像、その他
11	千葉広一	いつか	2018	車掌車の車内にテキスト、杉材の小屋組、その他
12	ありえだなお	いちご・心臓・チューリップ	2017	ライブペインティング、水性塗料

静岡県立美術館　2018.10.23（火）－11.11（日）

	作家名	作品名	制作年	技法、素材
01－04	鈴木諒一	郵便機	2011	ラムダプリント
05－06	鈴木諒一	観光 －滝－	2011	ラムダプリント
07－09	鈴木諒一	観光 －動物－	2011	ラムダプリント
10	鈴木諒一	窓辺	2018	4分28秒、3分26秒　映像
11	鈴木諒一	窓辺	2018	ライトジェットプリント
12－18	鈴木諒一	緑の光線	2018	ライトジェットプリント
19	鈴木諒一	家	2011/2018	8分8秒、1分51秒　映像

静岡市美術館　2018.10.23（火）－11.25（日）

	作家名	作品名	制作年	技法、素材
01	杉山功	SANTUARIO No.114	1996	大理石
02	杉山功	SANTUARIO No.242	2005	大理石、木
03	杉山功	SANTUARIO No.320	2011	大理石、木
04	杉山功	SANTUARIO No.369	2013	大理石、木
05	杉山功	SANTUARIO No.400	2016	大理石
06	杉山功	SANTUARIO No.412	2017	大理石
07	杉山功	SANTUARIO No.417	2017	トラバーチン
08	杉山功	SANTUARIO No.420	2017	大理石
09	杉山功	SANTUARIO No.424	2018	大理石
10	杉山功	SANTUARIO No.425	2018	大理石、グラナイト
11	杉山功	SANTUARIO No.124	1996	大理石
12	杉山功	SANTUARIO No.363	2013	大理石
13	杉山功	SANTUARIO Piccolo	2004	大理石

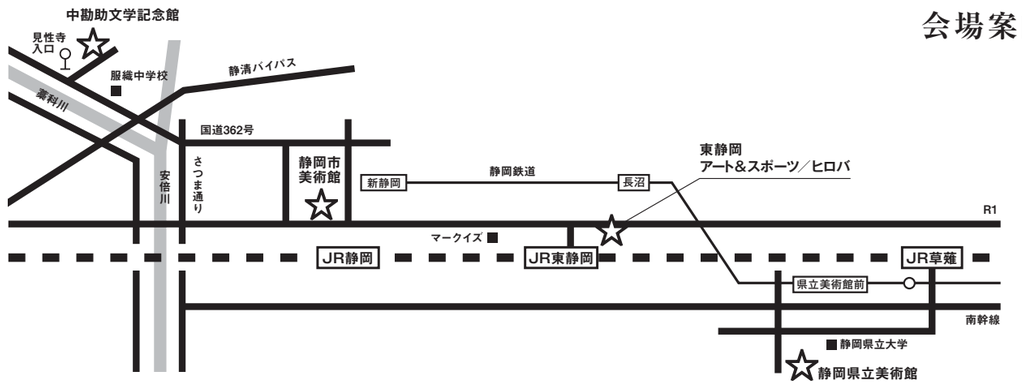
中勘助文学記念館　2018.10.23（火）－11.11（日）

	作家名	作品名	制作年	技法、素材
01	ノエル・エル・ファロル	アナログ・インデックス	2018	収集した日誌（1998～2018）、紙にシルクスクリーン、成形されたバルブ、構成・線刻されたガラス。構成された本。成形された蜜蝋の本。収集し定着した指紋。他

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ　イベント

・2018年5月13日、14日、19日　千葉広一作品展「Flowers」、車掌車ギャラリー
・2018年6月3日　東静岡『1st Anniversary Event』、ローラーパーク、芝生広場、コンテナ・アートベース
　白砂勝敏 自作ディジュリドゥ展示＆ライブ演奏「大地のオトダマ」
　岩野勝人コンテナ・アートベース公開制作
　静大生と一緒に楽しいヒロバを考えよう！ パネル展示＋ニュースポーツ体験
・2018年6月9日～7月15日（土日のみ）　コンテナ・アートベース公開制作／作品展示
　木下琢朗「刀耕火種 ～森のたねのゆくえ～」、コンテナギャラリー他
・2018年6月25日、26日　千葉広一オープンスタジオ、車掌車ギャラリー
・2018年8月26日　夏休み工作教室　木下琢朗「キノコスイッチ・ワークショップ」、コンテナギャラリー
・2018年10月14日　木下琢朗企画ワークショップ「木こりストーブでスモーク体験」、講師：繁田浩嗣
・2018年10月20日～11月10日　「めぐるりアート静岡2018」展及び会期中イベント（17件）
・2018年12月8日　常葉大学生による創作系・体験系ワークショップ「みんなdeあーと しぞーか」、芝生広場
・2018年12月23日～27日　千葉広一クリスマス展示「在り処」、車掌車ギャラリー
・2019年2月9日～3月3日（3/2を除く土日のみ）　佐藤浩司郎 作品展＆ワークショップ「TOY BOX」、コンテナギャラリー

会場案内



中勘助文学記念館

〒421-1201 静岡市葵区新間1089-120
Tel：054-277-2970
開館時間：10:00～17:00　休館日：月曜日
バス：しずてつジャストライン
静鉄新静岡（セノバ）またはJR静岡駅北口より
藁科線約25分で「見性寺入口」下車　※駐車場あり

静岡市美術館

〒420-0852
静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F
Tel：054-273-1515
開館時間：10:00～19:00
休館日：月曜日
JR静岡駅北口より徒歩3分

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

Tel：054-221-1229（8:30～17:15 平日のみ）
静岡市観光交流文化局　まちは劇場推進課
コンテナギャラリー　開廊時間：11:00～18:00
車掌車ギャラリー　開廊時間：18:00～21:00
休廊日：月曜日　JR東静岡駅北口すぐ
※駐車場あり（有料）

静岡県立美術館

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
Tel：054-263-5755
開館時間：10:00～17:30　休館日：月曜日
JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分　静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分、または静鉄バスで3分　※駐車場あり

展覧会
めぐるりアート静岡 2018　4つの会場をめぐるアートの散策。

会　期：2018年10月23日～11月11日（ヒロバのみ10月20日から、静岡市美術館のみ11月25日まで）
主　催：静岡大学、静岡県立美術館、静岡市美術館、静岡市、（公財）静岡市文化振興財団
企　画：白井嘉尚（静岡大学教授）
　以倉新（静岡市美術館学芸課長）
　植松篤（静岡県立美術館主任学芸員）
　名倉達了（静岡大学助教）
　平野雅彦（静岡大学特任教授）
　堀切正人（常葉大学准教授）
　柚木康裕（オルタナティブスペース・スノドカフェ代表）
会　場：東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ（白砂勝敏／石上和弘／木下琢朗／岩野勝人／千葉広一）
　静岡県立美術館（鈴木諒一）
　静岡市美術館（杉山功）
　中勘助文学記念館（ノエル・エル・ファロル）
事務局：漆畑雅子（静岡大学）

記録集
めぐるりアート静岡 2018　4つの会場をめぐるアートの散策。

発行日：2019年2月28日
編　集：企画者一同
写　真：遠藤幸廣（P9・P12・P13・P17・P20・P21）
　加藤和夫（P28・P29・P32・P33・P36・P37）
　千葉広一（P24・P25）
　平野雅彦（P8）
　木下琢朗（P16）
インタビュー：片桐義晴
デザイン：望月一弘（ジッカデザイン）
印　刷：松本印刷
発　行：国立法人 静岡大学 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

2018/10/27

ノエル・エル・ファロルさん アーティストトーク開催

中勘助文学記念館にて作品を展示しているフィリピン在住のアーティスト、ノエル・エル・ファロルさんのアーティストトークが、本日会場にて行われました。トークのお相手を務めるのは、静岡大学美術教授である白井嘉尚さん。ノエルさんが30年ほど前に初めて静岡を訪れた頃からの、長いお付き合いになるそうです。

文学者・中勘助が暮らしていた「杓子庵」のあるこの場所。代表作として知られる小説『銀の匙』は、まるで彼の日々の記録であるかのように書かれており、博物館における資料記録技術的なレベルにまで達している、とノエルさんは言います。
自伝的に過去の情景や生活を示している、そんな『銀の匙』の内容を受けて、この場所での展示の主題を「自らを語ること」に決めたというノエルさん。ノエルさん自身が過ごしてきた、様々な日々のことがらをこの場所で示し、またそれらを知識を形成するものである「本」のかたちを取って表現する。そのことによって、記憶と物語を紡ぎ出していく私たちにとっての『銀の匙』を提示してみたい。そんな思いが、この展示には込められているといいます。

たとえば、ミネソタで買ったという黒い表紙の冊子。ページの各々には食べ物やお酒に付いていたラベルが貼られています。なんでもこれはノエルさんの「ダイエット・プロジェクト」の日誌だそうですが、ダイエットと言っても減量のためのものではなく、人間が生きていく上での最低限の条件を調べるためのものだとか。その写真を奥様がFacebookに投稿した際に起きた、ノエルさんがダイエットをしているのだと勘違いされてのやりとり、また過度の飲酒を制限するよう活動している団体のメンバーと間違われてコメントを付けられたりしたことなど、その冊子に纏わる思い出が語られていきます。

また本のかたちをしたこちらの立体作品。これらはゴムの鋳型にドロドロに溶かしたパルプを流し込む、キャスティングと呼ばれる技法で作られたもの。その原料となった紙は、ノエルさんが使ったクレジットカードの領収書やレシートなど、ノエルさんの特定の買い物の出来事が込められたものであったり、ノエルさんの作ったシルクスクリーンの作品であったりします。それを乾かすのに掛かった4~5ヶ月の歳月も、長時間乾かす際に生まれてきた歪みというかたちで記録されています。
そして会場では本だけでなく、ガラスを用いて作られた作品も見つけることが出来ます。植物や昆虫の姿が美しく封じ込められた、透明なガラスの作品群。人々の指紋を顕微鏡で使うプレパラートのガラスの板に集め、手書きの名前のリストとともに箱に収めた作品。これらもまた別の形での、ノエルさんの出会ったものたちの記録です。
「人間はどんな人でも同じような記憶を持っている。ここに提示された日々の記録が、訪れて目にした人の中にも響いて欲しい。」というノエルさん。
プレパラートのガラス板に指紋を集めるプロジェクトには、ここを訪れた皆様も参加することが出来ます。中勘助に、杓子庵。そして新たに付け加えられた、作品による数々の記憶。この場所に重ねられたいくつもの時間の流れを、ぜひ皆様も、味わいにいらしてはいかがでしょうか。

2018/10/28

鈴木諒一さんワークショップ「色をあつめて、光のカーテンをつくろう！」

県立美術館では10月28日（日）に、出品作家の鈴木諒一さんによるワークショップ「色をあつめて、光のカーテンをつくろう！」が開催されました。
鈴木さんは、写真を使って作品制作をすることが多いですが、写真というメディアにとってもっとも特徴的な点は、光を写しとるということです。この光というものを、子どもたちに気づいてもらったり、何か発見してもらったりしてほしいと、鈴木さんはこのワークショップを考案されました。
鈴木さんが見つけてきた大きな透ける布地に、子どもたちは自由に絵を描いたり、セロファンやきらきら光るフィルムを貼ったりして「光のカーテン」を作りました。今回のワークショップは、作品を作るだけではなく、それを使って体験することにも重点が置かれています。
幸い当日は天気も良く、屋外に出てカーテンを太陽の光に当てたり、暗室にした室内でプロジェクターや懐中電灯の光に照らしたりして、見え方の違いを比べました。
子どもたちは、カーテンをひらひらさせたり、かぶってみたりと、それぞれに楽しんでいました。

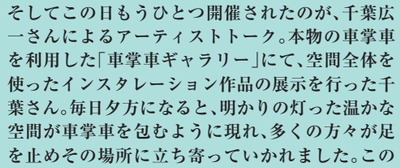
2018/11/10

木下琢朗さん、千葉広一さん アーティストトーク他、多数イベント開催されました！／ヒロバ

11月10日、東静岡アート＆スポーツ／ヒロバにてまず開始されたのは「いのちのめぐり スイハニング」。ヒロバにて作品を展示する木下琢朗さん企画、そして安東米店さんより四代目店主・長坂潔暁さんを講師にお招きしてのワークショップです。
「田んぼからお茶碗まで」をコンセプトにしているという長坂さんは、お米を食べられる状態にする最後の過程・炊飯をテーマに「スイハニング（炊飯＋ing）」と名付けたワークショップを各地で行っているお米のスペシャリスト。今年のめぐるりオープニングでもスイハニングを開催し、美味しいお米の炊き方だけに留まらず、森と街との関わりに思いを巡らしてほしいという木下さんの思いを、参加した皆様により深くお伝えして下さいました。今回も、燃料となる枝木をヒロバ近くの護国神社へ拾いに行くところからスイハニングはスタート。自分たちの手でスイハニングに使う枝木を集めていきます。
ヒロバに戻ると、かまどの材料となる丸太の皮剥きを開始。木下さんの作品の素材でもある、安倍川上流・玉川地区の山からやってきたヒノキにじかに触れながら、かまどの組み方・羽釜に入れる水の量・火力の強さなどに試行錯誤しつつスイハニングを進めていきます。緊張とともに徐々に高まっていく参加者の期待！！
沸騰してから15分の加熱の後、さらに待つこと15分…。さぁ、待ちに待った完成の瞬間です！！！

ふっくらと炊けたお米の登場に、一斉にあがる感嘆の声！ホカホカのご飯をさっそくお茶碗に盛り、持ち寄ったおかずを分け合いながら皆で食卓を囲みます。初めて食べる羽釜での炊きたてご飯に、溢れる皆様の笑顔！身近にある枝や木を使って、こんなにも簡単に美味しいご飯が作れるという驚きとともに、食を通して「いのちのめぐり」や、山からの恵みの大切さなどについて、思いを巡らせるきっかけとなりました。
美味しくご飯を味わったあとは、今回のイベントを企画した彫刻家・木下さんのアーティストトーク。トークのお相手を務めるのは、静岡大学美術教授である白井嘉尚さん。今回のスイハニングワークショップも、山と街との繋がりに思いを巡らせて欲しい、という木下さんの思いのもとに企画されたものでした。丸太から種のカタチに彫刻した木下さんの作品を、普段は人の入らないような掛川の粟ヶ岳の山の中で目にしたという白井さん。
「自然から生まれ、森に抱かれるような感じがして惹かれたその作品が、街のなかで展示されることでどのようになるか見てみたい。」そのような思いで、今回木下さんに出展のお声を掛けたのだと言います。作品を囲み、参加者の皆様に実際に触れてもらいながらトークは進行。
《刀耕火種～森のたねのゆくえ～》と名付けられた今回の出展作品。刀耕火種とは焼畑農業のことで、静岡でも井川のほうではまだ実際に行われているのだそう。急な斜面で稲作などが行えない土地のため、そこの木を切り倒し、火で燃やして畑を耕し種蒔きをするといいますが、「文化」を表す《カルチャー Culture》という語は、もともとは《耕す》という語源から来ているのだとか。今回の作品の制作でも火を使う工程が用いられており、「木こりストーブ」と呼ばれる作業によって種の内側が空洞にくり抜かれています。
木下さんの解説によると、木こりストーブとは元々、木こりの方たちが山で暖を取る際などに使う簡易型のストーブ。伐りたてのヒノキの生木の丸太に切れ目を入れ、その中心に火を付けると、木が元々含んでいる油によって燃えていくのですが、外側に行くほど水分を多く含んでいるため中心からじわじわと燃えていくのだとか。
木下さんは、とある天竜のイベントで偶然この木こりストーブと出会います。煌々と燃えている木こりストーブを見て、なんとかそれを彫刻としてかたちに残すことがは出来ないか･･･。そうして生まれたたものが今回の種の作品《刀耕火種～森のたねのゆくえ～》になり、6月にはヒロバにて公開制作も行われました。
また木下さんは、公開展示する土地の材を用いて制作することを心掛けており、今回も静岡の玉川地区より間伐されたヒノキを使って作品を作っています。造形の素材であるという以上に、木への関心を持っているのではないか、森がどうして木下さんの心を捕らえたのか、という白井さんの問いかけに、「祖母と浜松の春野町に住むことになり、より身近に自然を感じる森のそばに住む機会となった。山の中に材料を取りに行くことなどで、森への関心が深まっていった」という木下さん。「小さい頃から父の転勤で各地を転々としてきたが、父や祖父が生まれ育ったこの場所に戻ると、そこがルーツであるように感じる。携帯の電波も届かないような山奥にアトリエを構え、そこでは人よりも動物の数のほうが多い。真っ暗な山の中で恐怖も感じた。そこではより本能に近い感覚が浮かんできて、そこで感じたことは自分の腑に落ちて受け止められた。」とも木下さんは言います。
そうして生まれた今回の作品は、豊かな森の行く末を考えるための象徴としても表現したといいます。そんな思いの込められた作品を、皆で木々の下を歩き鑑賞しながら進行した本日のトーク。
森に関するエピソードを伺うと、面白いお話がいくらでも出てきて、思わず森についてもっと知りたくならずにはいられません。その土地の魅力をその土地の材を使って発信していくのが今の制作のスタイル、という木下さんのこれからの活躍が、大変に楽しみになるアーティストトークでした。

そしてこの日もうひとつ開催されたのが、千葉広一さんによるアーティストトーク。本物の車掌車を利用した「車掌車ギャラリー」にて、空間全体を使ったインスタレーション作品の展示を行った千葉さん。毎日夕方になると、明かりの灯った温かな空間が車掌車を包むように現れ、多くの方々が足を止めその場所に立ち寄っていかれました。この日も大変に多くの方がこの場所を訪れ、そんな車掌車を眺めながら、千葉さんのトークに耳を傾けました。幼い頃より、ずっと孤独を感じて生きていたという千葉さん。「教室の中では居辛さを感じ、絵を描いているときだけは自分らしくいられた。けれど目標としていた美大に入ることが出来ると、目標を見失い、山での生活に逃げていってしまった。その後卒業して教員になったあとも、劣等感の塊だった。子ども達の中に入っていけない、おはようと教室に入るのも怖かった。ずっとこのままでいいのだろうかと考えていた。」ご自分のそれまでを、噛みしめるように振り返り言葉にする千葉さん。そんななか、あるひとつの出来事がきっかけとなり、その思いに変化が訪れることになったといいます。それは数年前、当時教えていた高校の生徒達とともに、冬の雪山に小さな小屋を建てたときのこと。実はこの日、トークに先立ち、展示場所である車掌車ギャラリーのすぐそばで、とある作業が開始されていました。



それは、数年前に生徒達とともに雪山に建てたという、その小屋の再現の作業でした。あるとき千葉さんは授業の中で、雪原の中に小屋を作ろうという話を生徒たちに持ち掛けたといいます。それは自分が体験した雪山での情景を子ども達にも伝えたい、という思いから始まったこと。生徒達に描いてもらった設計図を元に、各パーツが観光バスのトランクに収まる大きさに小屋を設計、準備。冬山での厳しさを伝えて、それでも行きたいという生徒達とともに、長野県美ヶ原の雪山に向かい、そこに２つの小さな小屋を建てました。
《10代を生きる者の美術館 あるいは 祈りの場》と名付けられた2つの小屋を建てたこの体験は、大変大きな意味を持ちました。無言館と呼ばれる、戦没画学生の遺作となった絵画や手紙などが展示される場所を見学し、戦争や命、自らの生きかたについて考えること、「今を生きる」をテーマに制作した絵画を小屋内に展示することなど、様々な事柄がこの活動を通して参加者に体験され、極寒の雪山の中、星空の下で笑いながら過ごしている生徒達の姿を見て、「たとえ歴史に残らなくても感じてくれる人が居るのなら、自分の表現はこれでいいのかもしれない」と千葉さんは感じたといいます。
この日、車掌車のそばに再現されたのはそのうちの小屋のひとつ。その作業には現在の千葉さんの生徒さんとともに、当時一緒にその小屋を建てた卒業生も参加してくれました。
雪山での体験をしたそのとき、千葉さんは、自分自身の芸術家としての生き方と教員としての生き方に、答えを出せたといいます。また、そこで見た情景は一生忘れない、とも。「どこかにこうして温かい場所を作りながら生きていきたい」と千葉さんは言います。家族、というトークの中で何度も現れてきた言葉が、千葉さんのなかで大変に大きな意味を持っているということ、そしてその家族のように、出会った生徒達や人達を大切に思っていること。そんな思いの伝わってくる、心打つアーティストトークとなりました。
そしてトークのあとには、千葉さんの同僚の方々が演奏をご披露。その中には千葉さんのことを歌った歌もあり、千葉さんが作り上げてきた周囲との関係の温かさを、そんな場所からも感じ取ることが出来ました。
こうして、10日の数々のイベントも無事終了。

2018/11/25

めぐるり2018の締めくくり！ 杉山功さんアーティストトーク

杉山さんは1954年、旧清水市に生まれ、大学時代は美術大学にて彫刻を学びました。当時の大学の彫刻科では、人体などの具象彫刻の制作が全盛の時代。杉山さんもその中で、伝統的な具象彫刻を学んだといいます。
卒業後しばらくは大学の研究室に在籍し、公募展に出展するなどの活動をしていましたが、大学の先生の薦めもあり1983年にイタリアへ渡り、カッラーラの美術大学で学び始めます。戦後のイタリアといえば具象彫刻の聖地。古代ローマから現代に至るまで、多くの具象彫刻の巨匠達を輩出して来ました。そこでは、日本では写真でしか見られないようなたくさんの有名な作品を見ることが出来ますが、それらの本物の作品の数々を目にしていくうちに、自分自身が何をすればいいのかが分からなくなってしまったといいます。
「イタリア人からすれば、日本から来た自分がイタリアのような彫刻を作って何になるのか？自分の根っこは何なのか？ということになる。」そんな思いの中、一度は諦め日本に帰ろうと思った杉山さんは、そのつもりで立ち寄ったパリのポンピドゥセンターで初めて、現代美術と呼ばれるものに接しました。そこでそれまでの芸術観が変わることになります。
自分の持つ個人的な興味などを、作品を作る上で取り上げてもいいのだということに気付き、自分の根っこを探すために、いろいろなことを考えたという杉山さん。そこで感じたのは、美術のことを勉強しすぎたということ。「文化の根っこをヨーロッパに求めてはいけない。日本のそれまでの文化をぶっつりと切断して取り入れた文化を、そのままに受け入れていていいのか？自分の根っこを探さなくてはならないと感じた。」
そう考え、子どもの頃の、全く彫刻や美術という概念がなかった頃の気持ちに戻らなければならないと思った杉山さんが辿り着いたのは、小さな頃に様々な模型を作ったときの感動が一番大きかったということ。西洋の石で出来た建物に、かつて木の梁が使われていた形跡を見つけ創建当時の構造などを想像したという杉山さんは、骨組みが好きであったことや、それが高じて持つことになった建築への興味などから、骨組みを持った屋根のある建物と大理石とを組み合わせた作品を作り始めます。杉山さんがそこで着目したのは、木と大理石との時間的な関係性でした。年月の経過による変化が緩やかな大理石と比べ、それよりずっと速く朽ちていく木という素材。組み合わされたそれらの関係性は常に変化していき、それぞれの状態に出会うことが出来るのはまさに「一期一会」、その一瞬の時々のなかにしかありません。
それから杉山さんの意識は、日本と西洋との自然観の違いなどへも広がっていきます。自然を尊重し受け入れ、建物を作るにしても、出来るだけどこかに自然を残そうという日本の自然観。それに対して、スパンと自然を切り取ってしまう・自然を征服しようという意識の強く感じられる西洋の自然観。「建物を建てる際の地鎮祭など日本では自然に受け止められているが、イタリア人に話したら大笑いされた。それぞれに相容れない自然観がある。」という杉山さん。

木と石を組み合わせていた作品は徐々に石だけになり、建物である神殿は文化の象徴に、そしてそれの乗る下の部分は自然を象徴するものに。日本と西洋の両者の自然観の違いが、作品の主題として扱われていくようになります。たとえば会場の作品にも見られるような、石を磨かずに自然のままの近い状態で使われている土台の部分。日本では馴染みのある使われ方ですが、これも元々は西洋ではほとんど見られないものであったとか。それが最近は西洋でも見られるようになってきたのは杉山さんの影響では、という以倉さんのご指摘に、会場に笑いが溢れます。
イタリアにおける長年の制作への取り組み、またそれによって感じてきた様々な文化の違いを、実体験を交えながらお話ししてくださった杉山さんのトーク。その中で、様々な美術の歴史や海外の地名などが登場して来ましたが、それぞれの時代の美術の状況や都市の持つ特色などに、豊富な知識で分かりやすく説明を加えながらトークを進行してくださった以倉さん。杉山さんの作品や取り組みへの理解が深まるのはもちろんのこと、海外の文化や彫刻の歴史、ひいては自分たちの暮らす現在の日本の文化がどのようにして作られてきたのかなど、様々なことに興味や関心が広がっていく、大変に刺激的で濃密なトークとなりました。
その後も作品を改めて鑑賞したり、杉山さんにお話を伺う多くの皆様で大変に賑わった会場。
めぐるりアート静岡2018の最終日は、こうして大盛況のなか締めくくられました。
［めぐるりアート2018 HPブログより抜粋 文・写真 吉村友利。10/28のみ 植松篤］

めぐりアート静岡 2018

4つの会場をめぐる、アートの散策。